

三 沢 遺 跡

確認調査報告書

福岡県文化財調査報告書 第 279 集

2022

九州歴史資料館



三沢遺跡全景（南から）

序

この報告書は、福岡県教育委員会が国庫補助を受けて、令和元年度及び令和2年度にかけて実施した県指定史跡三沢遺跡の整備に係る確認調査の結果報告です。

三沢遺跡は昭和40年代中頃に九州縦貫自動車道建設用の土取場の候補地となり、福岡県教育委員会による試掘調査が行われました。その結果、弥生時代の集落が非常に残りの良い状態で発見されました。市民運動の盛り上がりもあり、昭和53年には福岡県指定史跡として保存されることになりました。

その後、平成22年には九州歴史資料館が三沢遺跡西側に移転し、遺跡と博物館が一体となって皆様に利用されています。

今回、三沢遺跡のさらなる活用を図るために、整備を進めることとなり、遺跡の内容をより明らかにするために確認調査を行うことになりました。

本調査の成果により三沢遺跡が更に皆様に親しまれる遺跡として活用されて行くきっかけとなれば幸いです。

令和4年3月31日

九州歴史資料館

館長 城戸 秀明

例 言

- 1 本書は、令和元・2年度に福岡県教育委員会が国庫補助を受け、九州歴史資料館が発掘調査を実施した、三沢遺跡第4・5次調査の報告書である。
- 2 本書には、三沢遺跡の解明及び今後の整備にかかる資料を得ることを目的として発掘調査を実施した、三沢遺跡第4・5次の確認調査及び昭和45・47年度に行われ、県指定史跡指定の契機となった第1・3次の試掘・確認調査の成果の一部を掲載した。
- 3 本書掲載の写真は、各調査・報告担当者が撮影した。空中写真の撮影は東亜航空技研株式会社、ワールドフォトサービス、株式会社とっぺんに委託した。なお、図版7-2・3、図版13-1は当館の岡寺良（現、福岡県立アジア文化交流センター）が撮影した。また、図版9-2は岡寺がAgisoft社製metashapeで作成したものである。
- 4 出土遺物の整理・復元、図化・浄書は、調査・報告書担当者及び当館整理作業員が行った。
- 5 溝出土の炭化物に関する放射性炭素年代測定を古環境研究所に委託した。
- 6 出土遺物及び図面・写真等の記録類は九州歴史資料館において保管する。
本書の執筆分担は下記のとおりである。

第1章 緒言	進村 真之
第2章 調査の概要	進村 岡田 論
第3章 自然科学分析	古環境研究所
第4章 昭和45・47年度の調査	吉村 靖徳
第5章 総括	進村
- 7 編集は進村が行った。

目次

第1章 緒言

- (1) 三沢遺跡と周辺の遺跡 1
- (2) 調査の経過 4
- (3) 調査組織 6

第2章 調査の概要

- (1) 調査の概要 6
- (2) 基本層序 10
- (3) 第4次調査検出遺構 11
 - 1) 竪穴住居跡 13
 - 2) 貯蔵穴 14
 - 3) 土坑 14
 - 4) 溝 17
 - 5) 包含層他出土土器 19
- (4) 第5次調査検出遺構 19
 - 1) 竪穴住居跡 19
 - 2) 土坑 19
 - 3) 溝 22
 - 4) 包含層出土遺物 25

第3章 自然科学分析

- 大溝出土炭化物の放射性炭素年代測定 27

第4章 昭和45・47年度の調査

- (1) 調査の経過 31
- (2) 検出遺構 32

第5章 総括 52

図版目次

巻頭図版	三沢遺跡全景（南から）	
図版 1	1 三沢遺跡全景（西から）	
	2 第4次調査 調査区全景（写真上が南西）	3 第4次調査1号住居（西から）
図版 2	1 第4次調査1号住居炉跡（西から）	2 第4次調査1号住居柱穴（北から）
	3 第4次調査2号住居（西から）	
図版 3	1 第4次調査2号住居炉跡（西から）	2 第4次調査1号貯蔵穴（東から）
	3 第4次調査1号土坑（西から）	
図版 4	1 第4次調査1号土坑土層断面（北から）	2 第4次調査大溝（南から）
	3 第4次調査大溝（東から）	
図版 5	1 第4次調査大溝（西から）	2 第4次調査大溝（北から）
	3 第4次調査東側トレンチ（北から）	
図版 6	1 第4次調査北側トレンチ（南から）	2 第4次調査出土遺物
図版 7	1 第5次調査遠景（東から）	2 第5次調査近景（北東から）
	3 第5次調査全景（写真上が南西）	
図版 8	1 第5次調査第1・2トレンチ全景（南から）	
	2 第5次調査第1トレンチ土層断面（南東から）	
	3 第5次調査第2トレンチ土層断面（東から）	
図版 9	1 第5次調査第3トレンチ全景（南から）	
	2 第5次調査大溝断割部（オルソ画像）	
	3 第5次調査大溝断面（昭和45年度調査試掘坑）（南から）	
図版 10	1 第5次調査大溝断面（北から）	
	2 第5次調査大溝年代測定試料採取箇所（南から）	
	3 第5次調査大溝年代測定試料採取箇所西半部（南から）	
図版 11	1 第5次調査大溝年代測定試料採取箇所東半部（南から）	
	2 第5次調査大溝年代測定試料採取箇所（小土坑）（南から）	
	3 第5次調査大溝年代測定試料採取箇所（小土坑接近）（南から）	
図版 12	1 第5次調査第4トレンチ全景（写真上が北西）	
	2 第5次調査第4トレンチ南西壁断面北半部（北東から）	
	3 第5次調査第4トレンチ南西壁断面南半部（北東から）	
図版 13	1 第5次調査第5トレンチ全景（写真上が南西）	
	2 第5次調査第5トレンチ南壁土層断面西半部（北から）	
	3 第5次調査出土遺物	

図版 14	1 三沢遺跡（南西から）	
	2 三沢遺跡（東から）	
図版 15	1 I・J地区（南西から）	2 高峠とI・J地区を望む（東から）
	3 Q地区（南西から）	
図版 16	1 手前から1号住居・4号土坑・3号住居（北西から）	
	2 2号住居（北西から）	
	3 手前から4号住居・3号土坑・2号土坑・1号土坑（北東から）	
	4 1号土坑と石戈出土状況（南西から）	
図版 17	1 1号土坑石戈出土状況（南西から）	2 溝（西から）
	3 9号土坑（北東から）	
図版 18	第1・3次調査出土土器	
図版 19	第1・3次調査出土土器・石器	

挿図目次

第1図	周辺の遺跡分布図（1/25,000）	3
第2図	三沢遺跡周辺地形図（1/3,000）	5
第3図	三沢遺跡遺構配置図（1/500）	9
第4図	第4次調査1・2号竪穴住居跡実測図（1/60）	12
第5図	第4次調査1号貯蔵穴実測図（1/30）	13
第6図	第4次調査1号土坑実測図（1/30）	15
第7図	第4次調査大溝土層図（1/80）	16
第8図	第4次調査出土土器実測図（1/4）	17
第9図	第4次調査出土石器実測図（1は2/3、他は1/2）	18
第10図	第5次調査Tr.1～3土層図（1/80）	20
第11図	第5次調査Tr.4・5土層図（1/80）	21
第12図	第5次調査Tr.3大溝平面実測図（S'45試掘坑、R'2断割）（1/80）	23
第13図	第5次調査出土土器実測図（1/4）	25
第14図	第5次調査出土石器実測図（1は2/3、2・3は1/2）	26
第15図	昭和45・47年度調査遺構配置図（1/1,200）	31
第16図	1～5号竪穴住居跡実測図（1/60）	34
第17図	竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）	35
第18図	土坑実測図（1/30）	37
第19図	土坑出土土器実測図1（1/4）	39

第20図	土坑出土土器実測図2 (1/4)	40
第21図	土坑出土土器実測図3 (1/4)	41
第22図	土坑出土土器実測図4 (1/4)	42
第23図	1号溝断面図 (1/20)	43
第24図	4号墳出土土器実測図 (14は1/4、他は1/3)	44
第25図	その他の遺構・層位出土土器実測図 (1/4)	46
第26図	出土石器実測図1 (1は2/3、他は1/2)	47
第27図	出土石器実測図2 (1/3)	48
第28図	対馬出土磨製石剣実測図 (1/2)	50

第1章 緒言

(1) 三沢遺跡と周辺の遺跡

三沢遺跡は背振山脈から派生する低丘陵、三国丘陵の北西端部に位置する。この三国丘陵は花崗岩を基盤としており、その花崗岩が風化・侵食された痩せ尾根と深い谷が入り組んでいる。その谷を利用して、多くの溜池が作られ、その溜池に毎年冬には多くの鴨がエサを求めて飛来した。この鴨を捕えるために特徴的な「無双網」を使用した鴨猟が盛んとなり、小郡の特産であった。

三国丘陵周辺は丘陵地であったため、戦前まで特に大きな開発は行われず、陸軍の実弾演習が夏から秋にかけて行われていた。

昭和16(1941)年に現在の三沢遺跡を含む周辺に福岡県種畜場が開設された。これは優良な家畜の生産を目的とした施設で、三沢遺跡の丘陵は牧草地として利用されていたようである。

昭和45(1970)年、日本道路公団による九州縦貫自動車道建設に伴う土取場の候補地として、三沢遺跡の丘陵が対象となり、事前に試掘調査が行われることとなった。試掘調査は調査対象地をA～T地区に分け、3m×3mの区画(グリッド)を規則的に配置し、坪掘りで行われた。試掘調査の結果、弥生時代の集落が良好な状態で残っていることが判明した。概報刊行までの経緯については第3章にまとめている。

福岡県教育委員会は三沢遺跡の保存協議を継続し、また、三沢遺跡を守る県民の会の活動も活発であった。このような動きの中で、昭和47(1972)年、日本道路公団は三沢遺跡の土取工事の範囲縮小を行うこととなった。

昭和53(1978)年3月25日、三沢遺跡の111,930㎡が福岡県指定史跡に指定され、保存されることになった。なお、今回報告する第3次調査地については、指定範囲の地番内であるが、土取り後の法面部分に当たり、協議当初より保存が難しいとされたために発掘調査が行われたものと考えられる。

種畜場は移転し、その跡地に郵政省の簡保レクセンターが昭和52(1977)年、工事着工、昭和54(1979)年に開園し、三沢遺跡は「弥生の森」として周辺の住民の憩いの場として親しまれた。

この三国丘陵周辺には多くの遺跡が見つかっており、今回報告する弥生時代、古墳時代を中心に概観する。

津古土取遺跡(1)では弥生時代前期の竪穴住居跡26棟が検出されている。それらの住居の中には中央に炉を配置し、その周辺に柱穴を配するものがある。これらの住居は朝鮮半島の松菊里遺跡に祖型が求められる松菊里型住居と呼ばれるものである。また、61号貯蔵穴からは朝鮮半島に由来する松菊里型土器も出土しており、朝鮮半島との深いつながりが考えられる。

三沢公家隈遺跡（2）からは弥生時代前期にさかのぼる木柵列や小区画の水田跡が検出されている。谷の出口付近で水の管理がしやすい谷水田が営まれていたと考えられている。

この後、三国丘陵上には弥生時代の遺跡が急増する。一ノ口遺跡（3）は、その中でも最大の集落で、弥生時代前期後半から中期前半にかけての竪穴住居跡が119棟とまとまって検出されている他、道路状遺構や柵列状ピットが多数検出されている。一ノ口遺跡に隣接する丘陵上の北松尾口遺跡（4）からも弥生時代前期後半から中期後半にかけての117棟の竪穴住居跡が検出されている。うち、中期前半の66号竪穴住居跡から青銅製ヤリガンナが出土している。

また、三沢遺跡の南側に近接する三沢蓬ヶ浦遺跡（5）も弥生時代前期後半から中期初頭にかけての集落遺跡である。

弥生時代前期中頃に入ると丘陵上に環濠が掘削されるようになる。環濠は三沢北中尾遺跡（6）、津古内畑遺跡（7）、横隈山遺跡第6・7地点（8）、横隈山遺跡第5地点（9）・横隈北田遺跡（10）、三国の鼻遺跡（11）で検出されている。なお、横隈北田遺跡の環濠内では貯蔵穴のみ61基が検出されており、環濠が動物から食料を守るためのものであるという説も提起されている。

また、この地域では朝鮮系無文土器の出土が特徴的であり、三国の鼻遺跡、横隈鍋倉遺跡（12）から出土している。三国の鼻遺跡の9号竪穴からは、甕・高坏・鉢・埴のセット全てが朝鮮系無文土器のみの構成で出土しており、渡来人の居住の可能性が指摘されている。横隈鍋倉遺跡からは多数の朝鮮系無文土器の他に朝鮮半島系である有柄式磨製石剣や柳葉形磨製石鏃が出土している。

弥生時代前期後半から中期前半の墓地の遺跡としては三沢遺跡に近接するハサコノ宮遺跡（13）があり、甕棺墓、土壙墓を中心としている。

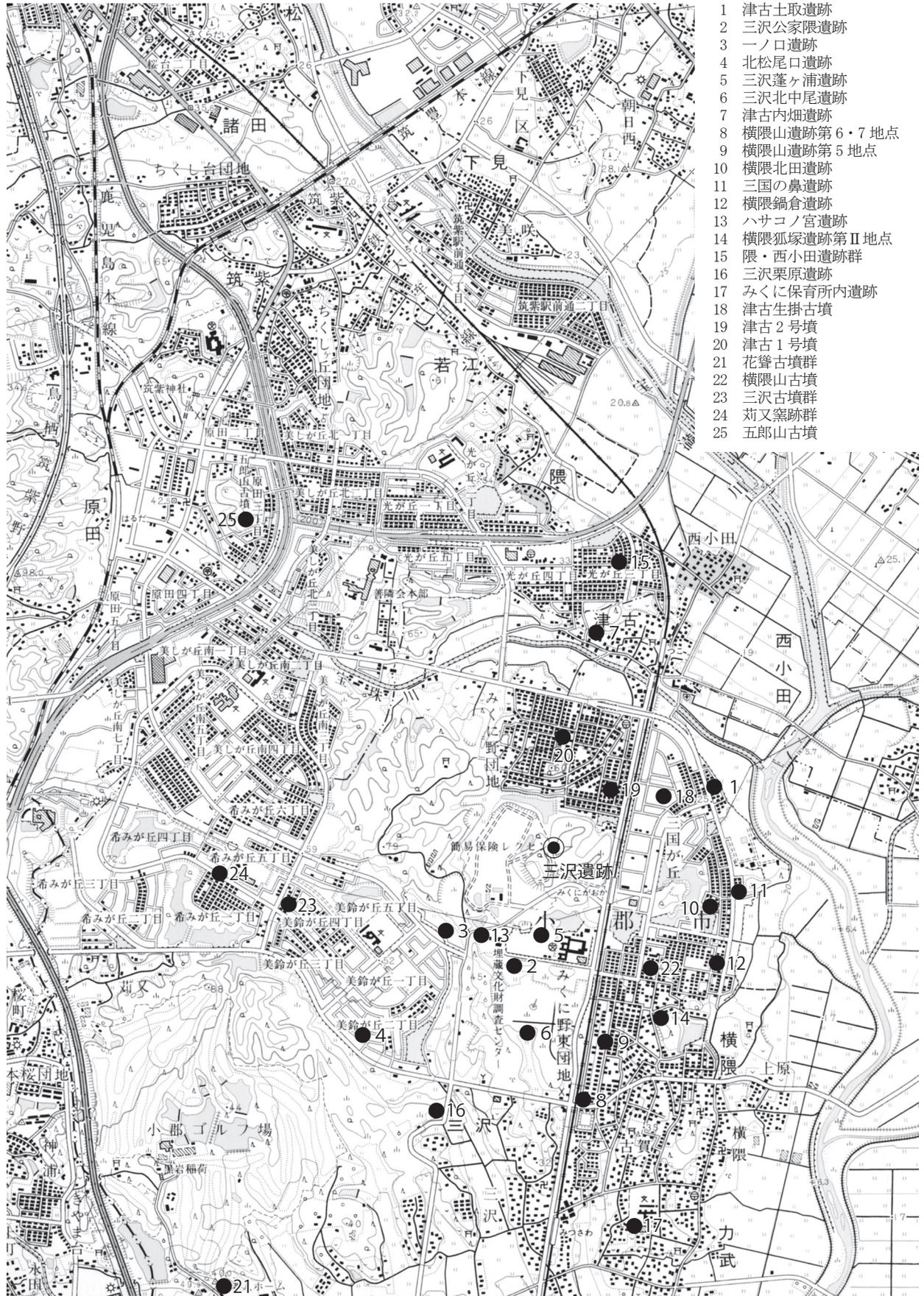
横隈狐塚遺跡Ⅱ地点（14）は弥生時代中期中頃から後期にかけての墓地の遺跡である。丘陵上に甕棺墓167基、土壙墓187基、石棺墓10基が密集して検出された。63号土壙墓から蕨手状渦文鏡が出土した他、18点の鉄器が出土している。また、128体の弥生人骨の出土は特筆すべき点である。

隈・西小田遺跡群（15）からは弥生時代前期末から後期初頭の大規模な墓地が発掘調査されている。この第13地点23号甕棺には成人男性骨と共に前漢鏡1面、鉄剣1本、鉄戈1本、ゴホウラ製貝輪8個が埋納されていた。

三沢栗原遺跡（16）は弥生時代中期末から古墳時代前半にかけて集落遺跡が中心で100棟近くが継続して営まれている。この後期の住居跡からは多くの鉄器が出土している。

みくに保育所内遺跡（17）は集落遺跡であるが、弥生時代後期中頃から後半の竪穴住居跡の屋内貯蔵穴の中から中国製の方格規矩鏡片が出土している。割れ口が研磨されており、破片の状態で大切にされていたものと考えられている。

古墳時代に入ると津古生掛古墳（18）、津古2号墳（19）、津古1号墳（20）、三国の鼻1号墳、花聳2号墳（21）、花聳1号墳、若干の空白があり、横隈山古墳（22）という首長墓



- 1 津古土取遺跡
- 2 三沢公家限遺跡
- 3 一ノ口遺跡
- 4 北松尾口遺跡
- 5 三沢蓬ヶ浦遺跡
- 6 三沢北中尾遺跡
- 7 津古内畑遺跡
- 8 横限山遺跡第6・7地点
- 9 横限山遺跡第5地点
- 10 横限北田遺跡
- 11 三国の鼻遺跡
- 12 横限鍋倉遺跡
- 13 ハサコノ宮遺跡
- 14 横限狐塚遺跡第Ⅱ地点
- 15 限・西小田遺跡群
- 16 三沢栗原遺跡
- 17 みくに保育所内遺跡
- 18 津古生掛古墳
- 19 津古2号墳
- 20 津古1号墳
- 21 花簀古墳群
- 22 横限山古墳
- 23 三沢古墳群
- 24 茹又窯跡群
- 25 五郎山古墳

第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

系列が明らかになっている。

津古生掛古墳は古墳時代前期、この地域で最初に作られた古墳で、全長 33m、不正形な造り出しを持つ。写實的に作られた鶏形土製品や方格規矩鳥文鏡が出土している。その後に造られたのが津古 2 号墳で全長 29m の前方後円墳である。主体部は割竹形木棺で、刀子 3 点、小玉 2 個が出土している他、周溝から「舟」を描いた土器が出土している。津古 1 号墳は全長 42m の前方後円墳で、現在、団地内で保存されている。三国の鼻 1 号墳はこの地域で最も大きく全長 66m の前方後円墳であり、1 号主体部は割竹形木棺と考えられ、2 号主体部も割竹形木棺である。副葬品は盗掘のため、わずかに鉄剣等が出土しているのみである。北側くびれ部より珠文鏡が出土しているが、盗掘の際の取りこぼしと考えられている。花簞 2 号墳は全長 30m 程度の前方後円墳と考えられており、鉄素材である鉄鋌 16 点や刀子、鉄製鋤先等が出土している。これに後続すると考えられているのが、花簞 1 号墳である。不時発見のため、詳細は不明ながら、石棺系石室から鉄鏃、鉄剣、鉄製鋤先等、豊富な鉄製品が出土している。5 世紀末頃には横隈山古墳が築造される。これは全長 32m の帆立貝式前方後円墳である。この横隈山古墳に並べられている埴輪は近接する三沢蓬ヶ浦遺跡の埴輪窯で焼成され、供給されたものと考えられている。三国丘陵には 5 世紀後半に入ると三沢古墳群（23）が築造される。円墳 67 基が確認され、ほとんどが盗掘を受けているが、馬具や武器などが副葬されていた。三沢古墳群に須恵器を供給したのが苅又窯跡群（24）である。6 世紀後半、合計 7 基の窯跡が見つまっている。ヘラ記号と工人の「クセ」から窯跡間の工人移動を追うことができると考えられている。五郎山古墳（25）も、苅又窯跡群から須恵器を供給されていた古墳である。墳径 32m の円墳で横穴式石室の内部には馬、人物、船などの装飾壁画が描かれている。

以上のように三沢遺跡周辺では、朝鮮半島との交流も含めた、活発な交流が見られる地域ということがわかる。

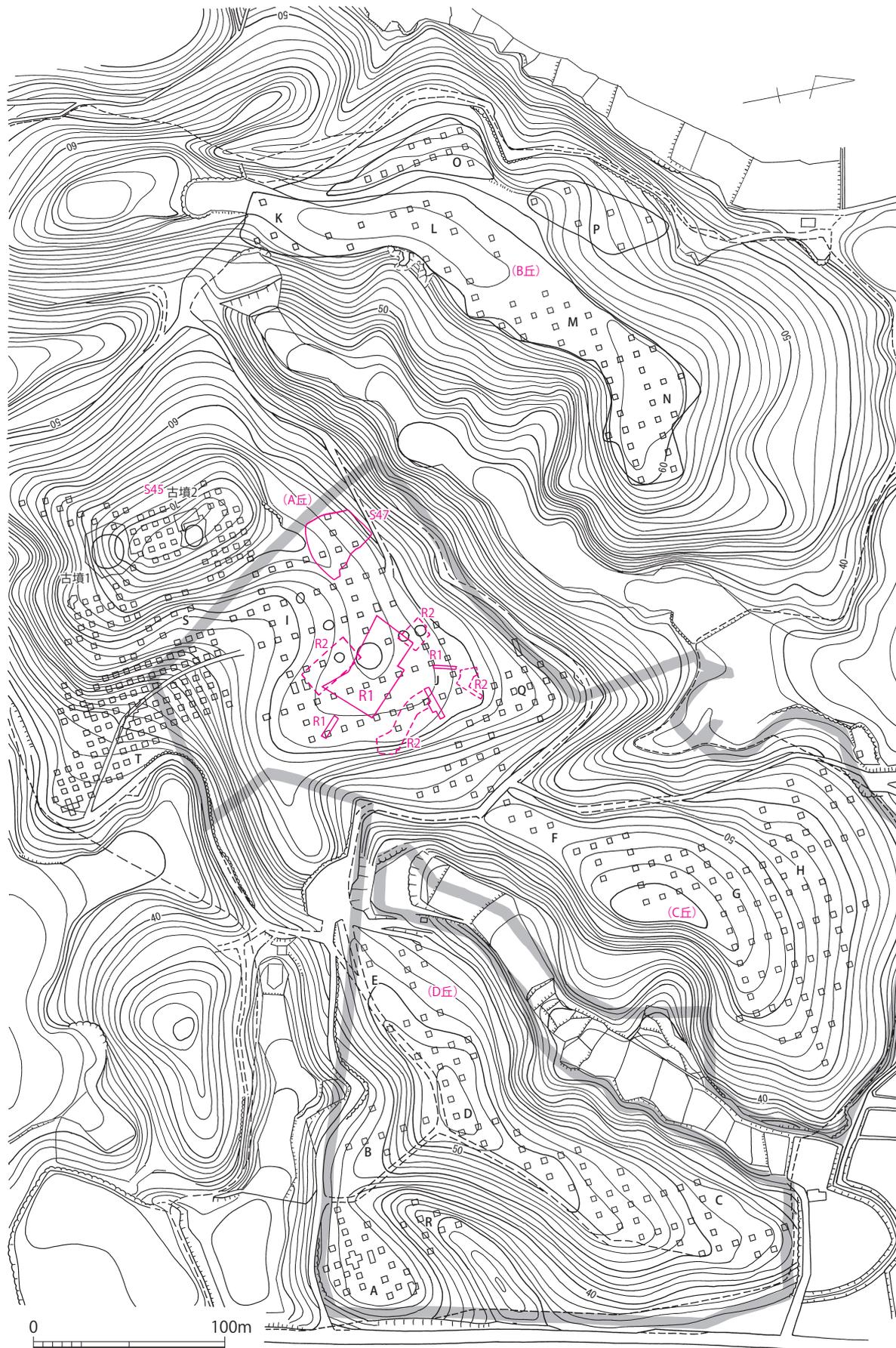
（2） 調査の経過

簡保レクセンターは閉園し、平成 12（2000）年に跡地を福岡県に返還している。福岡県は簡保レクセンター跡地を売却し、新たに住宅地として開発された。なお、三沢遺跡の南東に位置する A 地区の丘陵については小郡市教育委員会の試掘及び協議の結果、開発地内の緑地という形で当面保存されることになった。

三沢遺跡は引き続き、市民の憩いの場として利用されている。平成 22（2010）年、三沢遺跡の西側に九州歴史資料館が移転し、遺跡と博物館の一体的な活用が図られている。

平成 29（2017）年 8 月には『九州歴史資料館周辺及び三沢遺跡の整備に係る基本構想』を九州歴史資料館と福岡県教育委員会文化財保護課が作成し、新たなニーズに対応するために三沢遺跡の整備が計画された。調査は県の重点事業「福岡県歴史文化発信・体感事業」も兼ねているため、調査中に体験発掘等の事業を実施した。

そこで、かつての試掘調査では、グリッド（坪掘り）調査しか行われていなかった三沢遺



第2図 三沢遺跡周辺地形図 (1/3,000)

跡の面的な解明のため、確認調査を行うこととなった。

(3) 調査組織

発掘作業・整理作業・報告書作成に係る関係者は以下のとおりである。

	令和元年度	令和2年度	令和3年度
九州歴史資料館			
館長	杉光 誠	吉田 法稔	城戸 秀明
副館長	安永 千里	安永 千里	安永 千里
総務室長	中村満喜子	伊藤 幸子	伊藤 幸子
総務班長	畑山 智	畑山 智	高山美保子
事務主査	林田 朋子	古賀 知香	
主任主事	古賀 知香	田中 佑弥	田中 佑弥
主事	具志堅靖知	具志堅靖知	具志堅靖知 (～8月)
文化財室長	吉村 靖徳	吉村 靖徳	
埋蔵文化財室長			吉村 靖徳 (第1・3次調査報告担当)
文化財室長補佐	伊崎 俊秋	伊崎 俊秋	
文化財調査班長	森井 啓次	森井 啓次	森井 啓次
参事補佐	小川 泰樹	小川 泰樹	小川 泰樹 (整理担当)
企画主査	進村 真之 (第4次調査担当)		進村 真之 (報告担当)
技術主査		岡田 諭	岡田 諭 (第5次調査担当)(報告担当)

第2章 調査の概要

(1) 調査の概要

第4次調査は指定地の西側で昭和の調査で大型竪穴住居跡を検出したと報告されているI地区から行うこととなった。調査は丘陵の中央部を中心に行ったが、種畜場時代に削られたと考えられることから、遺構の残存状況は芳しくなかった。そのため、周辺部に北側トレンチ及び東側トレンチを設定し、周辺の旧地形の把握に努めた。また、並行して大溝部分の人力によるトレンチ掘削を行った。調査面積は1,500㎡である

令和元年

- 9月2日 福岡県文化財現状変更許可（1教文第684号）
- 9月12日 重機による掘削を開始。プレハブ搬入。
- 9月17日 作業員による掘削作業を開始。
- 9月18日 昭和の調査のグリッドを確認。
- 9月19日 文化庁藤井幸司調査官来現。
- 9月20日 台風接近のため養生。
- 9月30日 大溝部分の人力による掘削を開始する。
- 10月21日 小郡市立のぞみが丘小学校116名、「三沢遺跡の森を育む会」が育てた稲を模造石庖丁による稲刈りを行う。進村が実物の石庖丁を持って説明を行う。
- 11月10日 小郡市立三国小学校歴史クラブ8名が体験発掘。
- 11月19日 小郡市教育委員会の山崎氏、一木氏が来現。
- 11月27日 筑紫野市立二日市中学校生徒3名、春日市立春日南中学校生徒6名が体験発掘を行う。
- 12月11日 空撮。
- 12月20日 埋め戻し後、完全撤収。
現状変更完了（終了報告：令和2年3月11日 1九歴第566号－4）

第5次調査は三沢遺跡の整備に向けた基礎情報を得るための調査の2年目であり、調査対象範囲は第4次調査の周縁部である。昭和時代の調査で検出された大溝の構造解明と、他の遺構の分布状況の確認である。第1～5トレンチの計1,053㎡（第4次調査との重複分を除くと1,013㎡）を設定し、重機で表土及び遺物包含層を掘削した後、人力で遺構検出を図った。三沢遺跡は県指定史跡であり、遺構保護の観点から基本的に遺構掘削を行わなかったが、大溝については内容確認のため最小限度の断ち割りを行った。

第1トレンチは大溝北側の元地形や遺構の分布状況の確認を目的とし、2m×7.5m、面積15㎡のトレンチを設定した。地山面で直角に折れる遺構の輪郭を確認したが、全体の形状や規模は不明である。埋土に弥生土器が含まれることや、既往の調査で長方形の土坑が検出されていることから長方形の土坑であると想定される。地山面は現在の傾斜とほぼ変わらず、緩やかに傾斜している。

第2トレンチは第1トレンチと接続し、大溝の輪郭を確認する目的で設定した。トレンチの形状は大溝の輪郭に合わせる形で設定したため不整形だが、面積は80㎡である。トレンチ内で大溝以外の遺構は検出されていない。丘陵平坦部から下る傾斜変換点付近に該当するトレンチ南側は近代以降の削平されている。

第3トレンチは昭和45年度調査及び第4次調査で検出された大溝の平面形状の確認を目的とした。大溝の形状に合わせてトレンチを設定したため、トレンチ形状は不整形だが、面

積は 366㎡、第 4 次調査との重複する部分 8㎡を除くと 358㎡である。表土及び遺物包含層を除去した所で大溝を検出し、近代以降掘り込みが重複している状況が確認された。また、大溝の断面形状を確認するため一部を断ち割り、土層に含まれる炭化物を採取して年代測定を実施した。大溝の他はトレンチ北壁付近で弥生土器を包含する遺構のようなものを検出したが、面積が狭小であるため、詳細は不明である。

第 4 トレンチは丘陵北西部に位置し、昭和 45 年度調査で確認されたとされる竪穴住居跡 2 棟の形状及び他の遺構の分布状況、元地形の把握を目的として設定した。トレンチは 15m × 12m の長方形の一部を欠く形状で、面積は 142㎡、第 4 次調査との重複する部分 15㎡を除くと 127㎡である。トレンチ南東部で新たに円形竪穴住居跡 1 棟及び後続する長方形土坑 1 基を検出した。昭和 45 年度調査の試掘坑で確認されたとされる住居跡を明らかにすることはできなかったが、トレンチ内南側の試掘坑の周辺では弥生土器を含む土坑 2 基が重複する状況で検出された。トレンチ内北側の試掘坑周辺では遺構を確認できなかったが、遺構検出時に弥生土器の破片が出土したため、遺物包含層の一部、あるいは土坑の存在が想定される。地山面はトレンチ中央から北側に向かって傾斜しており、当時の地形が残っていたが、丘陵側はかなり削平されており、遺構の残存状況はよくない。

第 5 トレンチは丘陵南西部の緩斜面における遺構の残存状況を確認する目的で設定した。15m × 30m、面積は 450㎡、第 4 次調査との重複部分 17㎡を除くと 433㎡である。トレンチ内では昭和 45 年度調査の試掘坑が 4 箇所含まれ、竪穴住居跡 1 棟と古墳に関する遺構が検出されたとされる。今回新たにトレンチ中央東側で直径約 7 m の円形竪穴住居跡 1 基、この住居跡の北側で長方形土坑を検出した。昭和 45 年度調査で竪穴住居跡を確認したとされる試掘坑周辺では竪穴住居跡は検出されず、小土坑が確認されたのみであった。一方、トレンチの南壁付近では、古墳に関する遺構が確認された試掘坑を確認したが、周辺で明確に古墳に関する遺構は検出されなかった。ただし、遺構検出時に須恵器の小片が出土したため、トレンチ外に古墳に関する遺構が存在する可能性は十分考えられる。確認できた遺構は円形竪穴住居跡 1 棟と長方形土坑 1 基であったが、他は全体的に近代以降の削平が及んでいるためか、地形の窪みに残存した遺物包含層の一部が検出されたのみである。地山面は南西に向かって緩やかに傾斜している状況が確認できた。

令和 2 年

9 月 16 日 福岡県文化財現状変更許可（2 教文第 1627 号）

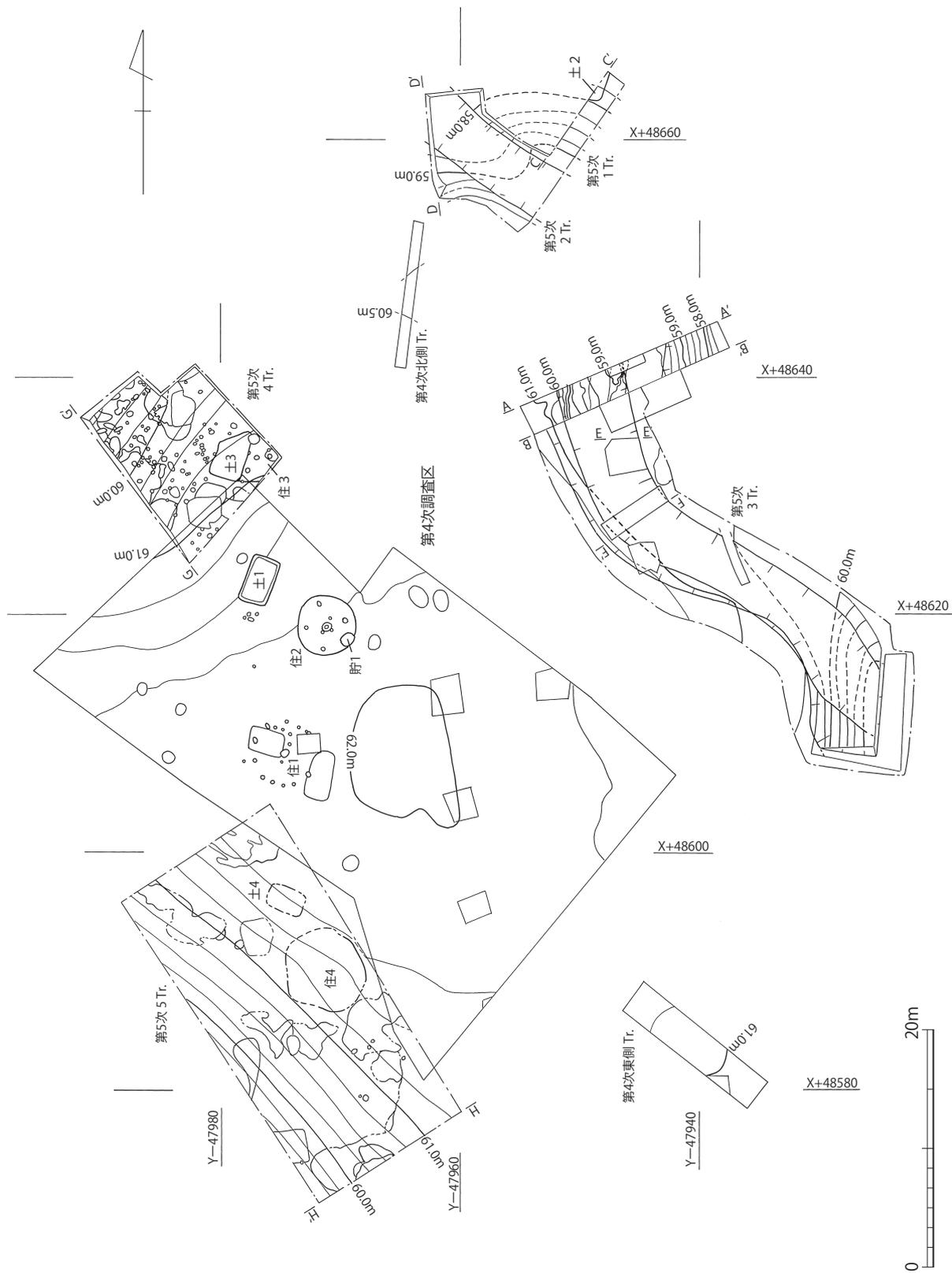
9 月 24 日 調査開始。第 1 トレンチ、第 2 トレンチにおいて重機掘削開始。旧表土下で土器片、石鏃片出土。

9 月 25 日 第 3 トレンチ重機掘削開始。

9 月 29 日 第 4 トレンチ重機掘削開始。

10 月 6 日 作業員投入。雇用関係手続、機材搬入、賃借物搬入、環境整備実施。

10 月 7 日 第 1 トレンチ、第 2 トレンチ整形、遺構検出作業。



第3図 三沢遺跡遺構配置図 (1/500)

- 10月 8日 第4トレンチ整形、遺構検出作業。
- 10月16日 埋蔵文化財基礎研修実施。大溝の断ち割り開始。第3トレンチ平板実測。
- 10月20日 第5トレンチ重機掘削開始。新規に円形竪穴住居跡確認。
- 11月 9日 大溝の下層から小穴（含炭化物）検出。
- 11月11日 大溝の丘陵側の肩確認。反対側は不明瞭。第5トレンチ地形測量。
- 11月12日 第1～4トレンチ地形測量。
- 11月16日 大溝にかかる昭和45年度調査の試掘坑において、当時、溝の底面まで掘削していなかったことが判明。
- 11月17日 大溝北側の遺物を含む遺構様の範囲が大溝に先行することを確認。第3トレンチ検出完了。
- 11月18日 第1・2トレンチ検出完了。第1トレンチで遺構の一部確認。第2トレンチで大溝の平面形状確認。第4トレンチで円形竪穴住居跡1棟確認。
- 11月25日 小都市文化財担当職員来訪。
- 11月27日 公開活用の一環で、発掘調査の様子を動画撮影する。
- 12月 7日 YouTubeに発掘調査の様子動画をアップロード。
- 12月 8日 第5トレンチ遺構検出開始。
- 12月25日 第5トレンチ遺構検出面全体を覆っている平行小溝からブルーシートの環が出土。

令和3年

- 1月 6日 作業再開。
- 1月18日 空中写真撮影委託。
- 1月21日 大溝断ち割り部において、年代測定用炭化物試料採取。各トレンチ写真撮影。
- 2月 5日 各トレンチ土層断面実測図作成。埋戻し開始。
- 2月17日 調査終了。

現状変更完了（終了報告：令和3年3月22日 2九歴第4990号）。

（2）基本層序

第4次調査の対象となった丘陵の中心部は牧草地として使用するために削られていることもあり、淡黒褐色の表土直下に花崗岩の基盤層が露出していた。周辺部は表土の下に、暗赤褐色土が薄く堆積し、その下層に花崗岩の風化土もしくは基盤層となっている。

第5次調査対象地は丘陵縁辺部に当たる。戦後の造成で丘陵頂部を削平し、その土を丘陵縁辺部に押し出して平坦面を広げているため、旧表土以下が削られず残存している。各トレンチで状況が異なるため、トレンチ毎に述べる。

第1トレンチ（第10図）

トレンチ北西壁の断面を図示した。基本層序は、表土、客土（戦後の造成土）、旧表土、腐植土、堆積土、地山である。トレンチ中央より傾斜の低い側では旧表土が残っている。旧表土下は第3トレンチで検出された大溝の土層とよく似た黒褐色土の堆積層が、トレンチ中央から傾斜の低い側にかけて確認された。対になる立ち上がりは確認できなかったため、溝なのか堆積層であるかは断定できない。この黒褐色土の下位には暗赤褐色～暗赤黄褐色土が堆積しており、若干地山のブロック土が混じる。地山は黄褐色～赤褐色土で、標高が高くなる程赤みが強くなる。検出された土坑は地山面から切り込んでいる。

第2トレンチ（第10図）

トレンチ西壁の断面を図示した。基本層序は、表土、客土（戦後の造成土）、大溝埋土、地山、である。大溝の上面は表土の傾斜より角度が強く、これに応じて客土の厚さも斜面の低い側が厚くなる。

第3トレンチ（第10図）

第3トレンチの基本層序は第2トレンチと同様である。特にトレンチの北側、すなわち丘陵の縁辺部は客土の厚さが約2mにも及ぶ。

第4トレンチ（第11図）

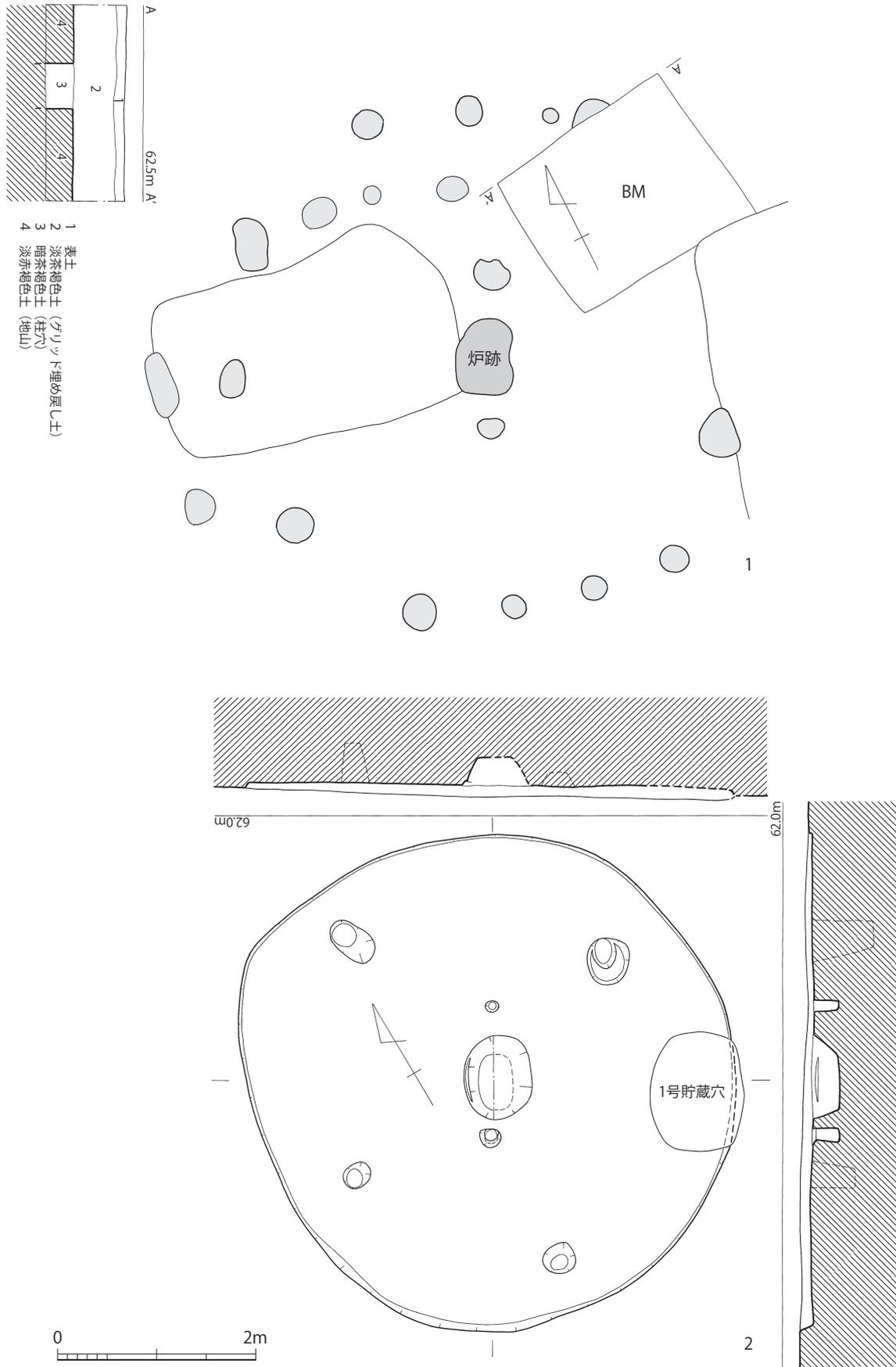
トレンチ南西壁の断面を図示した。基本層序は、表土、客土（戦後の造成土）、旧表土、地山である。第1トレンチと同様、傾斜の低い側に向かって丘陵上の土を押し出しており、地山由来の土と旧表土由来の土が互層になっている。旧表土下には植物由来の攪乱や弥生土器片や炭化物を含む遺構あるいは落ち込みがあり、地山から切り込む。地山は標高が高い側が赤褐色、低い側が褐色で漸移的に変化する。

第5トレンチ（第11図）

トレンチ南東壁の断面を図示した。基本層序は、表土、客土（戦後の造成土）、腐植土、地山である。客土の下面は平行小溝の底面であり凹凸が続く。トレンチ中程から低い側にかけて傾斜が強くなる部分は客土が複数層に分かれる。客土の下位には黒褐色の腐植土層があるが、傾斜の低い側にのみ堆積する。なお、この層中から須恵器の小片が出土した。地山は第4トレンチと同様赤褐色～褐色を呈す。

（3） 第4次調査検出遺構

第4次調査により検出された遺構は住居跡3棟、貯蔵穴1基、土坑11基、溝1条、ピット多数である。このうち、発掘調査を行った遺構についてのみ記述を行っている。以前の調査の際に検出された遺構と同じ遺構の可能性が高いものがあり、遺構ごとに記している。



第4図 第4次調査1・2号竪穴住居跡実測図 (1/60)

1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (図版1・2、第4図)

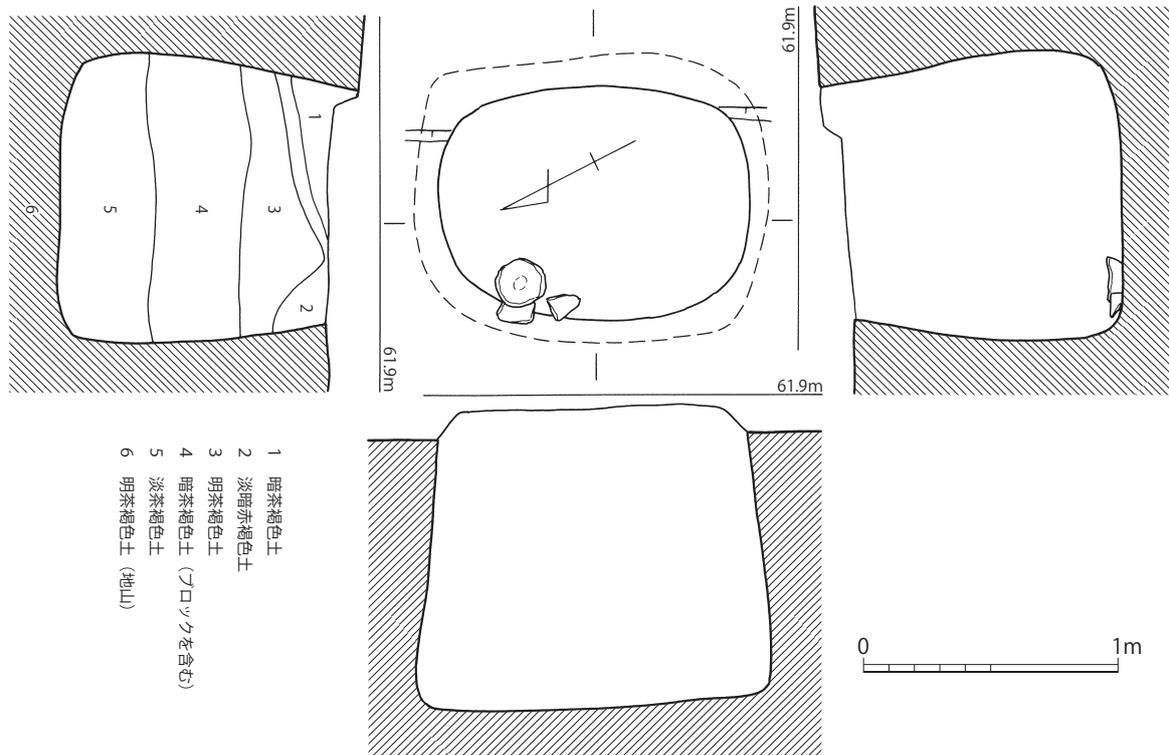
丘陵の中央付近で検出した。第1次調査で検出した大型住居に該当するものと考えられる。検出のみで掘削は行わなかった。住居跡に三角点 (BM) が重なるように設置されており、その壁面を精査したところ、住居の柱穴が断面で確認でき、遺構面を削りすぎた可能性が高い。そのため、住居の壁は検出できていない。柱穴の配置から、直径約7mの円形であったと考えられる。中央に南北0.8m×東西0.5mの楕円形の炉跡があり、その南北に直径0.3～0.4m程度の支柱穴2本を配する。炉跡の周囲約3mの付近に柱穴12本が放射状に配されており、三角点の未掘部分を含めると本来13～14本の柱穴があったと考えられる。遺物は出土しなかった。

2号竪穴住居跡 (図版2・3、第4図)

1号竪穴住居跡の北側で検出した。1号貯蔵穴に切られる。直径約5mの円形で、壁の深さは最も残りの良い場所で0.1m程である。中央に南北0.9m×東西0.7m、深さ0.3mの楕円形の炉跡を検出した。その南北に直径0.1～0.2m、深さ0.3mの支柱穴が配される。炉跡の周囲約1.7～2mに深さ0.5～0.6m程の柱穴3本を検出した。配置的には本来4本あったと考えられるが、1本は検出できなかった。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (図版6、第8図)

1は弥生土器の甕の口縁部である。口縁部が外反するもので、器表面の調整は磨滅のため



第5図 第4次調査1号貯蔵穴実測図 (1/30)

不明である。口径 22.0cm である。

2) 貯蔵穴

1号貯蔵穴（図版3、第5図）

2号竪穴住居跡の東壁に重複する位置で検出した。2号竪穴住居跡を切る。形状から貯蔵穴と判断した。平面プランは上面で南北約 1.2m × 東西 0.9m の隅丸方形を呈する。底面のほうがやや広がっており、南北 1.4m × 東西 1.1m ほどになる。深さは現存で 0.9m 程である。床面付近から弥生土器が出土している。

出土土器（図版6、第8図）

2・3は弥生土器の甕の底部である。2は、わずかに上げ底で、底径は 8.0cm である。器壁は 1.0cm ほどあり、やや厚めの印象を受ける。底部付近の内外面に指頭状の圧痕が残る。内外面の調整は磨滅により不明である。3も甕の底部である。底径は 6.6cm、内外面の調整はナデである。

3) 土坑

1号土坑（図版3・4、第6図）

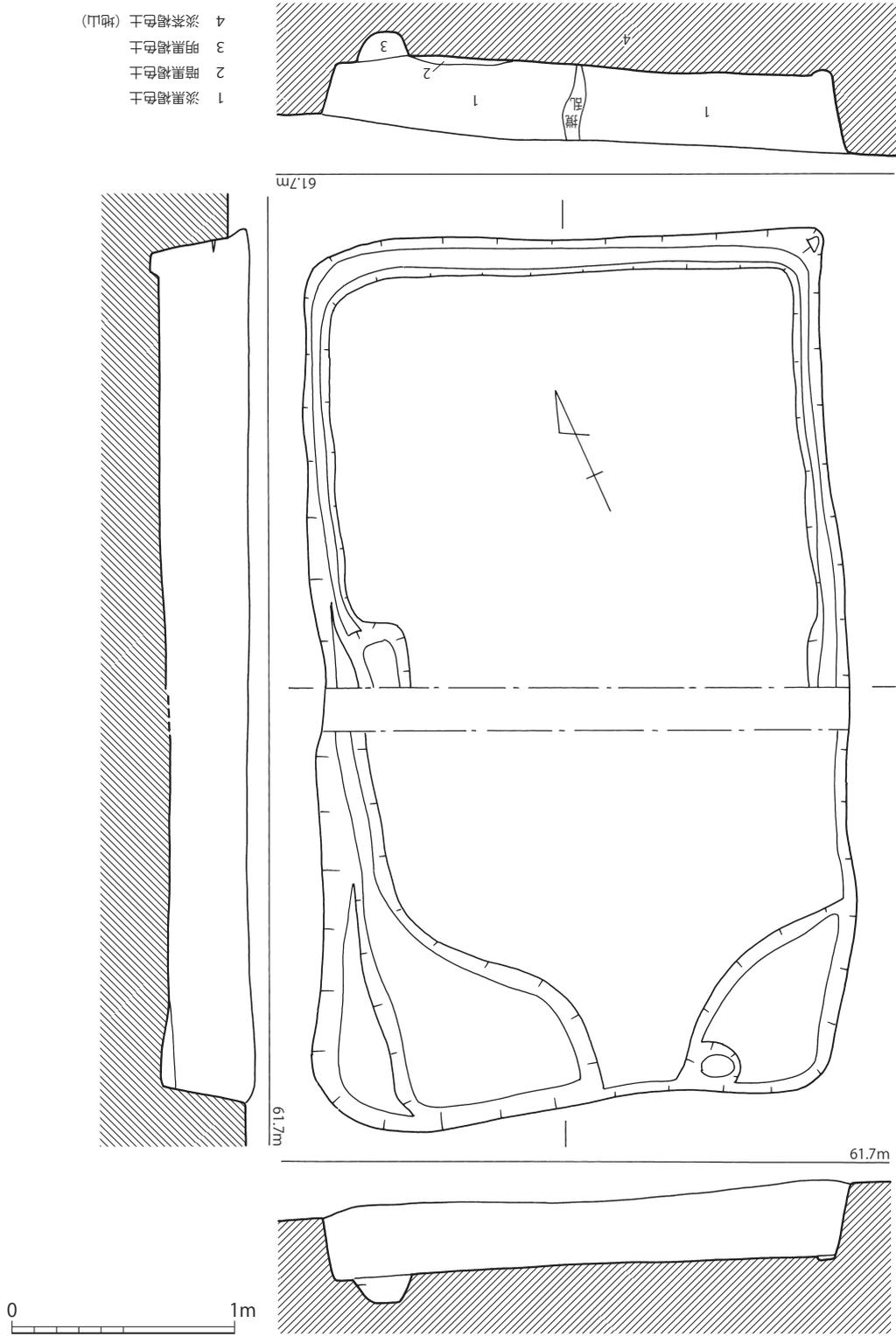
調査区のやや西寄りで検出した。平面プランは南北 4.0m × 東西 2.4m の長方形である。壁の深さは最も残り良いところで 0.4m 程である。壁面には壁小溝がほぼ全周し、南側はその幅が広がっている。柱穴等は検出されていない。形状から小形住居の可能性もある。遺物は弥生土器・石器が出土している。

出土土器（図版6、第8図）

4～12は弥生土器の甕である。4～6は外反する口縁部である。4の内外面の調整は磨滅して不明である。5の外面にはハケメがわずかに残る。6は大きく外反し、内面にミガキが施される。7～11は断面三角形の突帯を貼り付けるものである。7は表面が磨滅しており、調整は不明である。8は全体にナデ調整を施している。9は表面が磨滅しており、調整は不明である。10・11は断面に突帯の貼り付け痕が観察できる。いずれも器表面の調整は磨滅により不明である。12は平底の底部である。底径 6.0cm で、器表面は磨滅により、調整は不明であるが、外面の一部に指頭の圧痕が残る。13は支脚である。底径 7.2cm の隅丸方形を呈し、高さは 7cm 程が残存する。表面の調整はナデである。

出土石器（図版6、第9図）

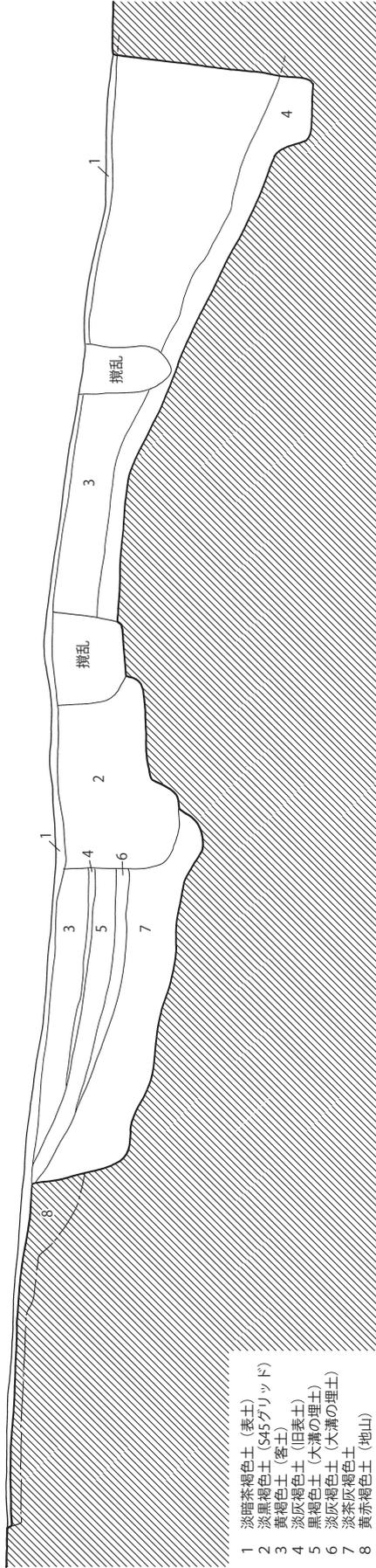
2は石庖丁の破片である。凝灰岩製で、刃部の一部が残存する。厚さ 0.5cm である。4は扁平片刃石斧である。頁岩製で側面部分が欠失する。全体的に丁寧なつくりで長さ 6.1cm、厚さ 0.8cm である。



第6図 第4次調査1号土坑実測図 (1/30)

61.5m A'

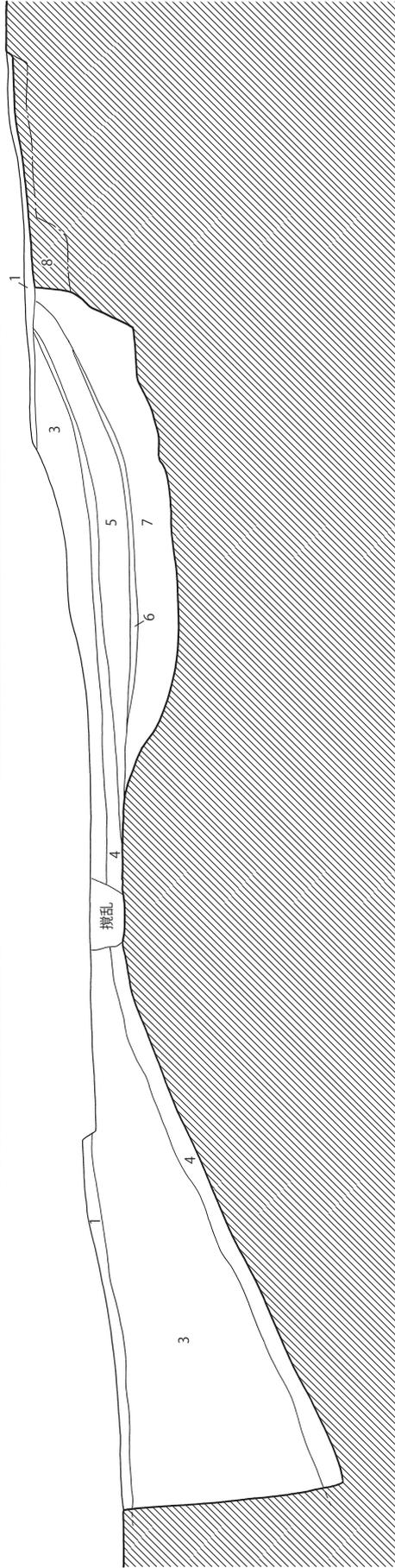
A



- 1 淡暗茶褐色土 (黄土)
- 2 淡黒褐色土 (S45グリッド)
- 3 黄褐色土 (黄土)
- 4 淡灰褐色土 (旧黄土)
- 5 黒褐色土 (大溝の埋土)
- 6 淡灰褐色土 (大溝の埋土)
- 7 淡灰茶褐色土
- 8 黄赤褐色土 (地山)

61.5m B'

B'



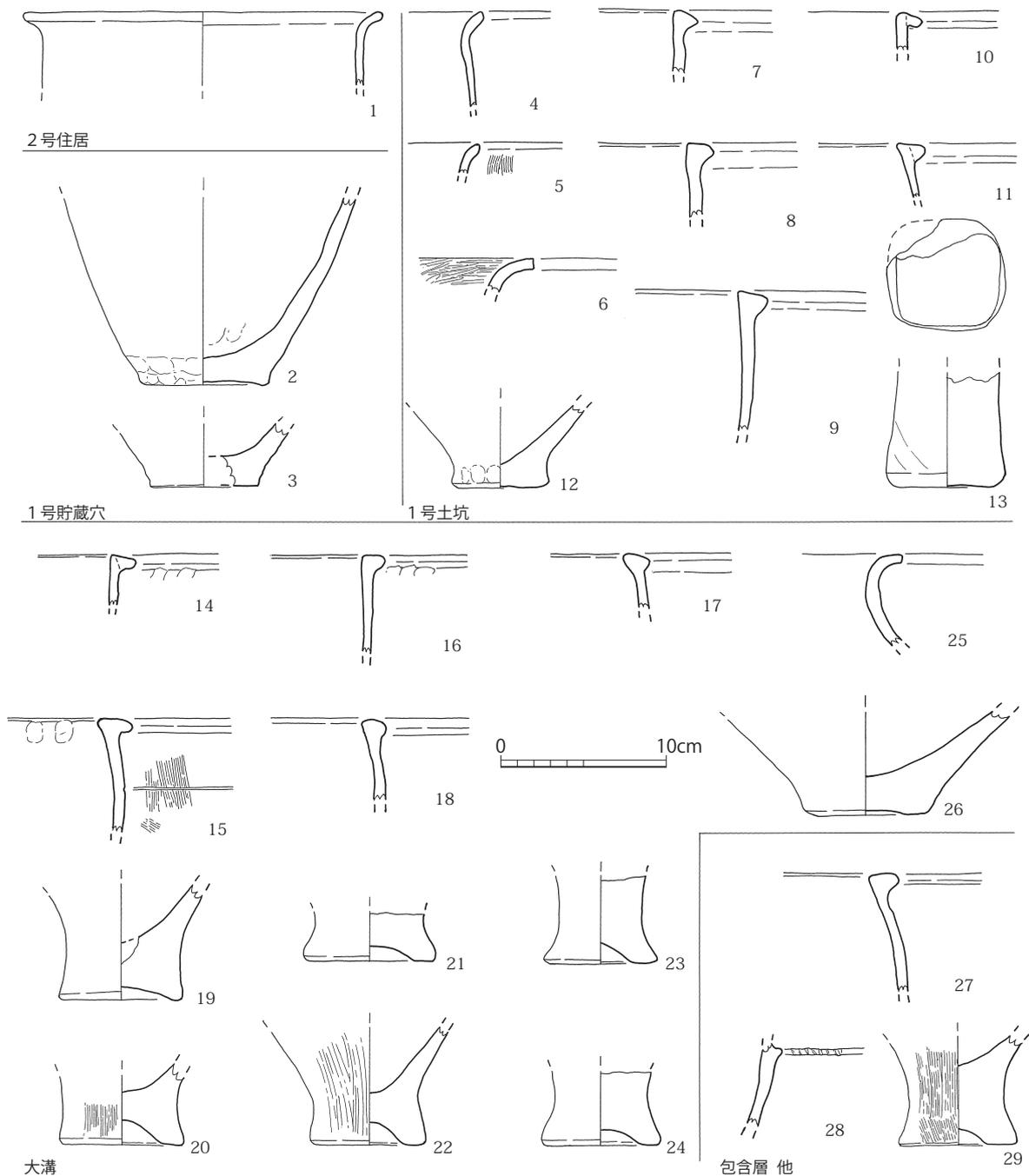
第7図 第4次調査大溝土層図 (1/80)

4) 溝

大溝 (図版4・5、第7図)

試掘調査の際に調査区の北側で検出されていたもので、その時点で「大溝」の名称が与えられており、混乱を避けるため、今回もこの名称を踏襲する。試掘調査では遺構面での検出にとどまり、掘削は行われていない。第4次調査ではその一部についてトレンチ調査を行った。

大溝は北側へ緩やかに下っていく丘陵の端部近くに位置する。平坦面を広げるためか、I地区丘陵頂部の付近を削った土で大溝付近にも厚く客土がされている。削った際に大溝の肩の部分も削られたことが土層観察の結果、判明している。これは種畜場時代に牧草地として



第8図 第4次調査出土土器実測図 (1/4)

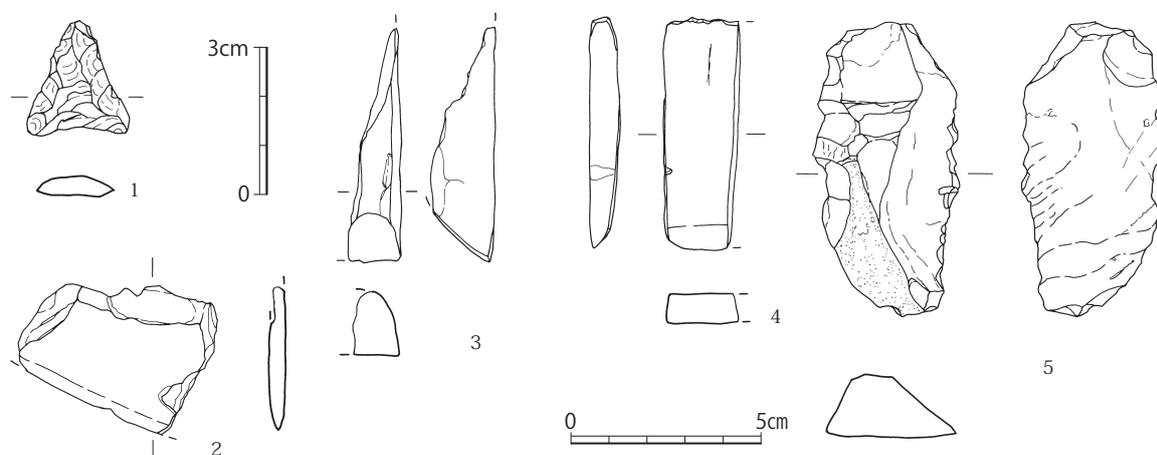
利用するための改変であると考えられる。また、今回トレンチの西面で、第1次調査の際のグリッドの痕跡を検出している。大溝の幅は約6m、深さは最も深い部分で1.6mが残存している。壁の立ち上がりは極めて緩く、断面の形状はカマボコ状を呈する。土層の観察によるとレンズ状に自然体積で埋まっていったと考えられ、掘り直しなどの痕跡は見られなかった。遺物は弥生土器・石器が出土し、それ以降の遺物は出土していない。

出土土器（図版6、第8図）

14～24は弥生土器の甕である。14～18はいずれも断面三角形の突帯を貼り付けた口縁部である。14は断面で突帯貼り付け時の痕跡が観察でき、突帯下端には圧痕が残る。15の外面はハケメ調整、口縁下に一条の沈線が巡る。内面には口縁部に並行して圧痕が見られる。16は突帯下端部に圧痕が見られる。内外面の調整は磨滅しており、不明である。17の表面の調整は磨滅しており、不明である。18は内面にナデ調整が見られる。19～24は甕の底部である。19は底面全体が上げ底になるもので、底面のみナデ調整が残る。底径7.4cmである。20～24は中心部分のみが上げ底になる底部である。20の外面調整はハケメであり、その他の部分は磨滅している。底径は7.5cmである。21は全体に磨滅しており、調整は不明である。底径は7.6cmである。22は外面にハケメが施される。23・24は厚底となる。いずれも内外面の調整は磨滅のため、不明である。23の底径は7.0cmである。24の底径は7.2cmである。25・26は弥生土器の壺である。25は大きく外反する口縁部である。内外面の調整は磨滅のため不明である。26はわずかに上げ底となる。内外面の調整は磨滅のため不明である。

出土石器（図版6、第9図）

1は安山岩製の石鏃である。長さ2.3cm、幅2.0cm、厚さ0.4cmで基部がわずかに窪む。3は柱状の片刃石斧である。凝灰岩製で長さ6.2cmが残存し、厚さは1.7cmである。表面がかなり風化している。5は安山岩製のスクレーパーである。剥片の一部に刃部を付けてい



第9図 第4次調査出土石器実測図（1は2/3、他は1/2）

る。風化の具合が著しい。

5) 包含層他出土土器 (図版6、第8図)

27～29は弥生土器の甕である。27は断面三角の突帯を貼り付けたもので、内外面の調整は磨滅のため、不明である。28は胴部片である。屈曲部に断面三角突帯を貼り付け、やや斜めにキザミを施す。内外面の調整はナデである。29は廃土中で検出した。厚底で中心部分のみが上げ底になる底部である。外面はハケメで、底面はナデ調整である。底径は7.2cm。

(4) 第5次調査検出遺構

1) 竪穴住居跡

3号竪穴住居跡

第4トレンチ東隅付近で検出した。戦後の造成で削平されており、検出面で炭化物の集中箇所が確認できたことから、床面に近い高さで検出したと考えられる。トレンチ内で全体の形状を捉えることはできないが、円形竪穴住居跡で径は4m以上と推定される。第5次調査第2号土坑と一部重複し、先行する。検出のみで掘削はしていない。

出土土器 (第13図1)

1は第3号竪穴住居跡の検出時に出土した弥生土器甕の口縁部である。口縁端部は断面逆L字状、復元口径24.6cm、器面調整は内外面磨滅しており不詳、色調は赤褐色である。

4号竪穴住居跡

第5トレンチ中央付近で検出した。直径約7mの円形竪穴住居跡である。全体の形状を確認したが、斜面の低い側は輪郭が不明瞭である。検出のみで掘削していないため詳細な構造は不明である。

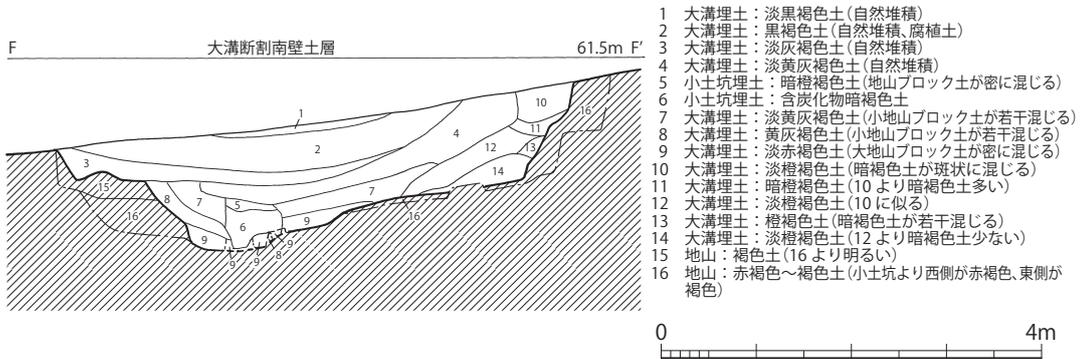
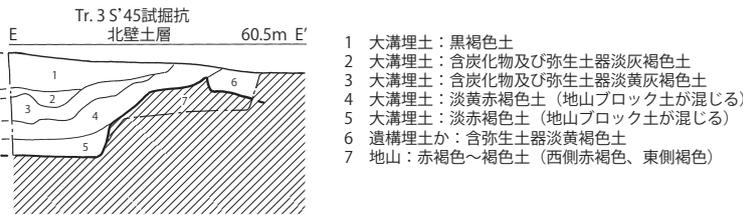
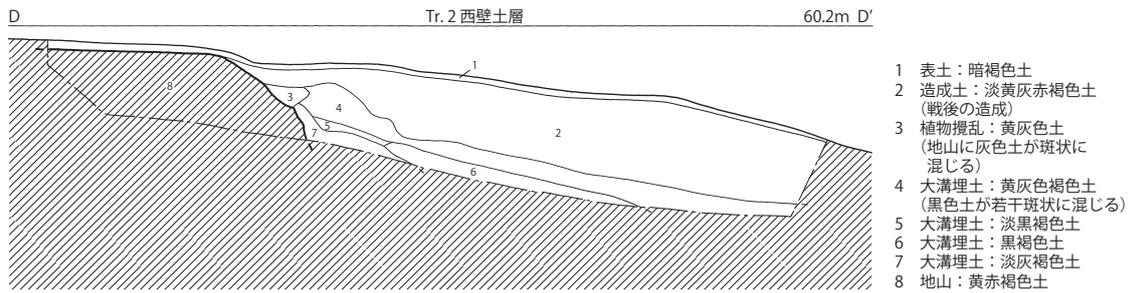
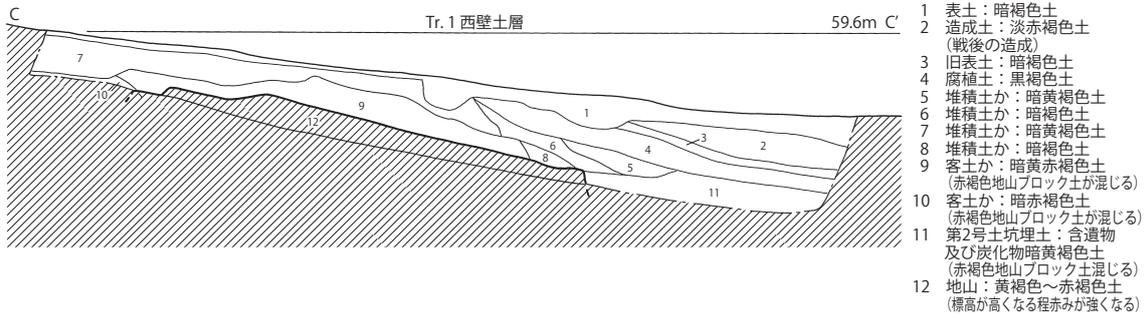
2) 土坑

2号土坑

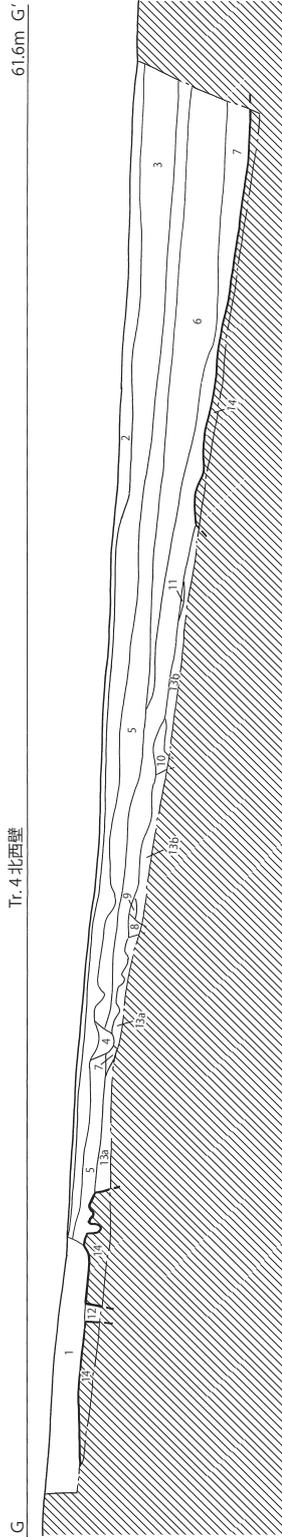
第1トレンチ北端付近で検出した。輪郭は直線的で直角の角を1箇所確認した。大部分はトレンチ外に延びるが、第4次調査でも確認された長方形の土坑と同種のものと考えられる。検出のみで掘削していないため、詳細は不明である。

3号土坑

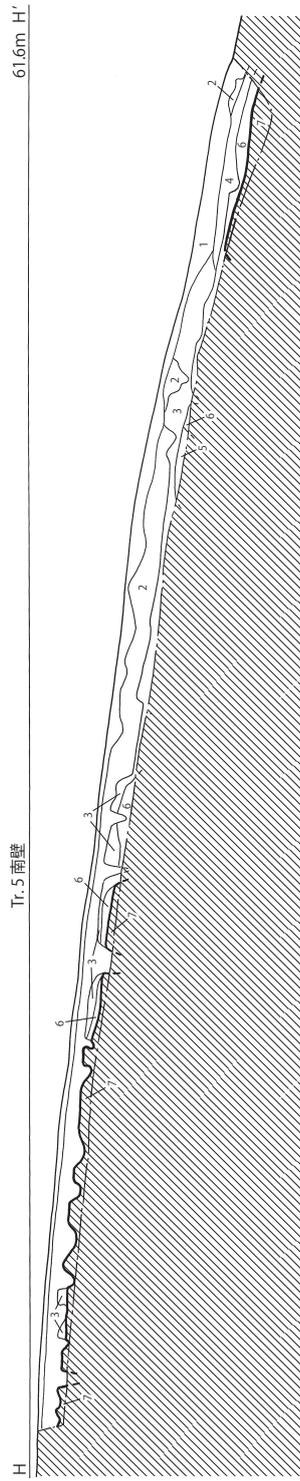
第4トレンチ東隅付近で検出した。第2号竪穴住居跡と重複し、後続する。輪郭が不明瞭な部分があるが、幅2.5m、長さ約3.0mの長方形を呈し、主軸は北から20°東に振る。検出のみで掘削していないため、詳細は不明である。



第10図 第5次調査 Tr.1～3土層図 (1/80)



- | | |
|--|--|
| <p>1 第4次調査埋戻土</p> <p>2 表土：暗褐色土</p> <p>3 造成土：暗黄灰褐色土（戦後の造成）</p> <p>4 小穴埋土：暗褐色土（地山ブロック土が混じる）</p> <p>5 旧表土（二次堆積）：淡灰褐色土（小地山ブロック土が混じる）</p> <p>6 造成土：淡灰褐色土（小地山ブロック土が混じる）</p> <p>7 旧表土：淡灰黒褐色土（小地山ブロック土が若干混じる）</p> <p>8 小穴埋土：暗褐色土（黒褐色土が混じる）</p> | <p>9 植物増乱：淡黒褐色土</p> <p>10 腐植土：黒褐色土</p> <p>11 腐植土：黒褐色土</p> <p>12 小穴埋土：暗黄褐色土（地山と暗褐色土が混じる）</p> <p>13a 遺構埋土：含礫生土器及び炭化物淡黄褐色土</p> <p>13b 遺構埋土：含礫生土器及び炭化物淡黄褐色土</p> <p>14 地山：赤褐色～褐色土（標高が高い側が赤褐色、低い側が褐色、漸移的に変化）</p> |
|--|--|



- | |
|---|
| <p>1 表土：黒褐色～暗褐色土</p> <p>2 造成土：淡黄灰褐色土（戦後の造成）</p> <p>3 造成土：暗灰褐色土（6と7のブロック土が若干混じる）</p> <p>4 造成土か：暗黄灰黒褐色土（6と7が裏層状に混じる）</p> <p>5 遺構埋土か：暗黄灰褐色土（6と7のブロック土が若干混じる）</p> <p>6 腐植土：含須臾器小片黒褐色土（遺物少量）</p> <p>7 地山：赤褐色～褐色土（標高が高い側が赤褐色、低い側が褐色、漸移的に変化）</p> |
|---|



第 11 図 第 5 次調査 Tr. 4・5 土層図 (1/80)

4号土坑

第5トレンチの北側、第2号竪穴住居跡の1.5m北で検出した。幅2.0m、長さ3.1mの長方形を呈し、主軸は北から68°西に振る。検出のみで掘削していないため、詳細は不明である。

3) 溝

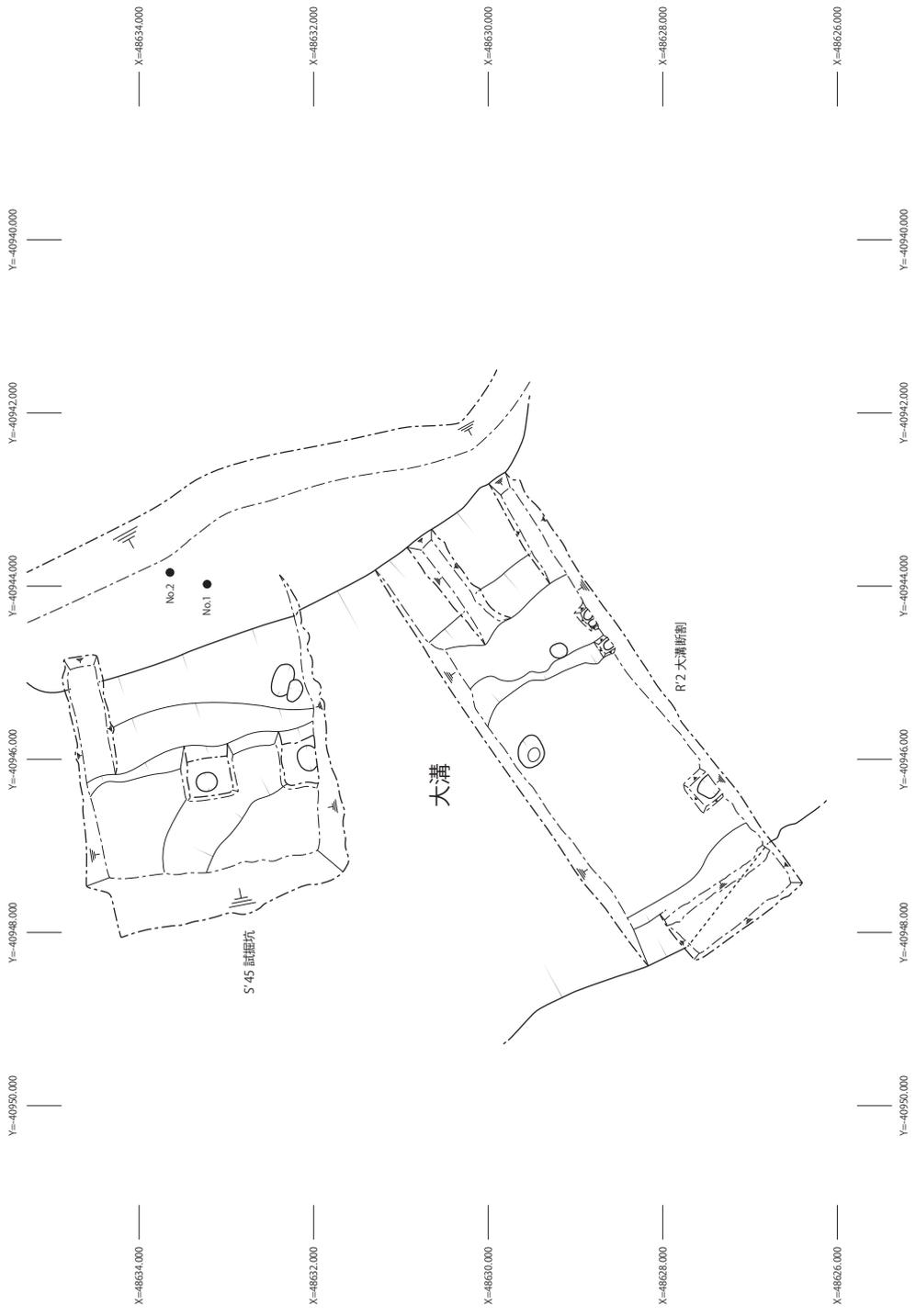
大溝

昭和45年度調査ではおおよその位置が推定され、この時に丘陵の外側へ向かって延びることが示唆され、第4次調査では大溝の幅と断面形状が明らかになった。第5次調査では大溝の走向の把握、及び断割によって、大溝の埋没時期や埋没課程の確認を企図した。

第5次調査では第2トレンチ及び第3トレンチにおいて検出した。埋土上層の黒褐色土が特徴的であり、黒褐色土を追いかけるように検出を進めた。規模は上端幅5.4m、下端幅3.5m、深さ1.5m、断面形状は台形である。大溝は丘陵周縁の傾斜変換点に沿って蛇行し、第2トレンチの北端まで続く。大溝の延長方向ではトレンチ外に現地形の僅かな窪みが続いており、大溝は丘陵の斜面を徐々に下りながら延長すると考えられる。一方、第3トレンチの東端では大溝が等高線に直交するように走向するため、延長は丘陵の斜面を急に下りるように走向すると考えられる。以上のことから、大溝は丘陵頂部の平坦面を圍繞しないと考えられる。

第5次調査では1箇所で断ち割り、昭和46年度調査の試掘トレンチ1箇所でも再調査を行っている。断割部で大溝の土層断面を観察すると、大溝の最上層は前述の黒褐色土、下位には、淡灰褐色土層が堆積し、レンズ状の堆積を示すことから、自然堆積であることがわかる。これらの層の下位は、位置を西側にずらして重複するかのよう堆積が続く。まず、淡黄灰褐色土の自然堆積層があり、下位に地山の小ブロック土が混じる淡黄灰褐色土層がある。この境界面から直径約50cm、深さ約50cmの小土坑がある。小ブロック土が混じる淡黄灰褐色土層の下位は地山のブロック土が混じる黄灰褐色土が堆積し、最下層は地山ブロック土が混じる淡赤褐色土である。大溝西側の壁面付近は地山に似た淡橙褐色土～暗橙褐色土が堆積する。大溝の底面は東側が最深部で西（丘陵頂部方向）に向かって緩やかに上がる。昭和46年度調査の試掘トレンチの再調査は大溝の東半部がかかっている。土層断面の再検証の結果、当時は大溝最下層を地山と誤認して掘削していなかったが、断割部の土層と同様、最下層は地山のブロック土が混じる淡赤黄褐色土～淡赤褐色土である。また、大溝の東肩は弥生土器を含む層と重複し、大溝が後続することがわかった。面積が狭小であり、大溝に先行する層が包含層であるか、遺構であるかは不詳である。

大溝の断割部では、各層に含まれる炭化物を採取し、年代測定を実施した。詳細は第3章で述べるが、ここでは分析結果から大溝の埋没時期を検討する。測定した試料の採取箇所は①最上層（黒褐色土層の上位に僅かに堆積した層）、②淡黄灰褐色土層（黒褐色土層下位）、③淡黄灰褐色土層（地山ブロック土混じる）、④黄灰褐色土層（地山ブロック土混じる）、



第 12 図 第 5 次調査 Tr.3 大溝平面実測図 (S'45 試掘坑、R'2 断面) (1/80)

⑤淡赤褐色土層、⑥小土坑、の6箇所である。2 σ （95.4%確率）の暦年代を見ると、①は72.5%でA.D.1447～1521である。従って、大溝の最終埋没時期の上限はこの年代であろう。黒褐色土は試料が採取できなかったが、土質は近似しており、測定結果は援用することが可能であると考えられる。次に、②は95.4%でB.C.542～397であるが、後述する下位層の年代より古いため、今回の測定結果を採用することを控える。③～⑥はB.C.399～346と、B.C.203～296の2通りの結果が示されている。③、⑤、⑥は両者とも確率的には差がないが、④は後者が73.2%とやや高い確率を示す。従って、今回の測定結果から、黒褐色土下位の埋没年代の上限はB.C.203～317を候補としたい。しかしながら、今回の年代測定は試料数が少ないため大溝の埋没時期を断定すべきものではなく、今後は測定数を増やし、精度を高めていかなければならない。

大溝の機能については、丘陵頂部を圍繞しないことや断面形状が台形であることから集落の環濠ではないと考えられる。三沢遺跡の南西約600mにある一ノ口遺跡では弥生時代前期末から中期初頭にかけての道状遺構が検出されている。2号道状遺構は最大幅5.7m、深さ0.8～1.0m、斜面を蛇行しながら上っていく走向を示す。埋土は上層が黒色～黒褐色土で、下位は茶褐色系の花崗岩風化土が主体である。遺構内の底面及び壁面に多くのピットが検出され、その内いくつかは門または上部構造を伴う施設の存在が想定されている。以上の特徴は、規模や埋土の状況、遺構内の小土坑の存在等、類似点が多く、三沢遺跡の大溝も集落に通じる道路跡であった可能性が考えられる。

出土土器（第13図5～8、11、12）

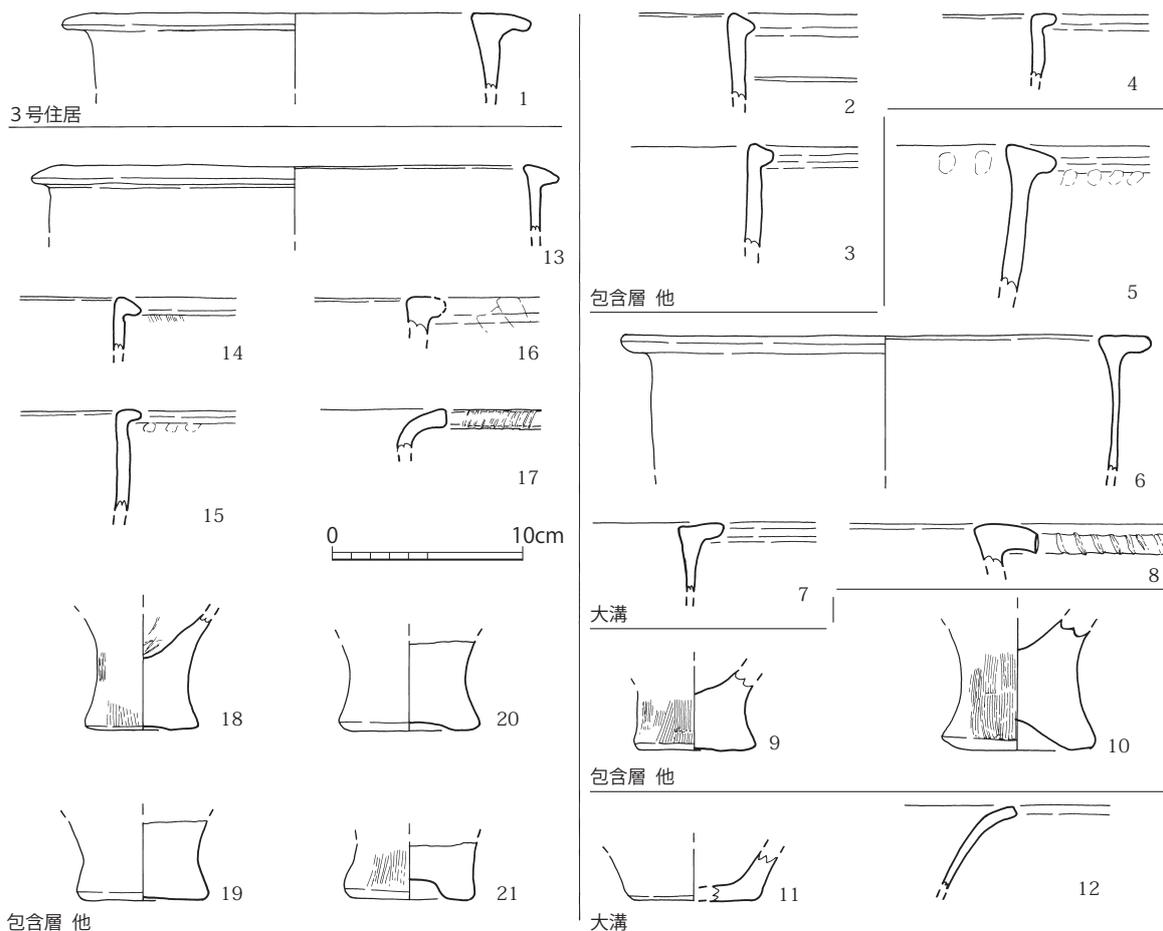
5～8、11、12は第4層淡黄灰褐色土層から出土した弥生土器である。5は甕の口縁部である。断面は粘土貼付けにより、やや短い逆L字状を呈し、内面はやや内湾する。口径は不明。器面調整は内外面ともに磨滅しており不詳だが、口縁端部の内外面に指頭圧痕が見られる。色調は灰黄褐色を呈する。6は甕の口縁部である。復元口径は28cm、口縁部は平坦で、断面は粘土貼付けにより逆L字状を呈し、内面は内湾する。器面調整は内外面ともに磨滅しており不詳。色調は暗黄茶褐色を呈する。7は甕の口縁部である。断面は粘土貼付けにより逆L字状を呈する。器面調整は内外面ともに磨滅しており不詳。色調は茶褐色を呈する。8は甕の口縁部である。断面は逆L字状でやや下方に湾曲し、端部にはキザミが施される。器面調整は内外面ヨコナデである。色調は暗灰黄褐色を呈する。11は昭和46年度調査の試掘トレンチの淡黄灰褐色土層から出土した鉢の底部である。復元底径は7cm、底部形態は平底である。器面調整は磨滅しており不詳だが、内面はナデか。色調は内面が灰黄褐色、外面が灰黄褐色～茶褐色を呈し、外面の一部が二次的に被熱しており赤変している。12は壺の口縁である。端部は平坦で、やや外反する。器面調整は内外面ともに磨滅しており不詳。色調は灰黄褐色を呈する。

4) 包含層出土遺物

出土土器 (第 13 図 2～4、9、10、13～21)

2～4、9、10、14、15 は第 3 トレンチ検出時、16、18～20 は第 1 トレンチ検出時、13、17、21 は第 5 トレンチから出土した。

2 は弥生土器甕の口縁部である。粘土貼付けにより断面は三角形を呈する。器面調整は内外面ともに磨滅しており不詳、外面の粘土帯より 2.5cm 下に沈線が 1 条巡る。色調は茶褐色を呈する。3 は弥生土器甕の口縁部である。粘土貼付けにより断面は三角形を呈する。器面調整は内外面ともに磨滅しており不詳。色調は暗黄茶褐色を呈する。4 は弥生土器甕の口縁部である。粘土貼付けにより断面は短い逆 L 字状を呈する。器面調整は内外面ともに磨滅しており不詳、口縁下に窪みが 1 条巡る。色調は暗黄茶褐色を呈する。9 は弥生土器甕の底部である。底径 6.4cm、底部の形態は僅かに上げ底気味である。器面調整は外面が縦方向のハケメである。色調は灰黄褐色を呈する。10 は弥生土器甕の底部である。底径 8.1cm、底部の形態は上げ底である。器面調整は外面が縦方向のハケメ、底部内面はヨコナデである。



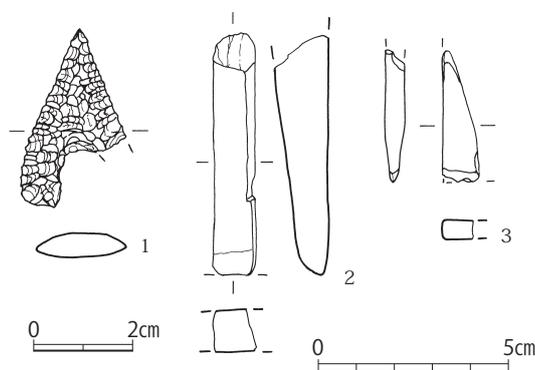
第 13 図 第 5 次調査出土土器実測図 (1/4)

色調は内面が灰黄褐色、外面が黄茶褐色を呈する。13は弥生土器甕の口縁部である。復元底径28cm、口縁部は鋤先形を呈するが内面の突出は短い。器面調整は内外面ともにヨコナデ、色調は茶褐色を呈する。14は大溝に先行する包含層検出時No. 2である。弥生土器甕の口縁部である。粘土貼付けにより断面は三角形を呈するが、端部はやや下方を向く。器面調整は内外面ともに磨滅しており不詳。色調は灰黄褐色を呈する。15はトレンチ壁面清掃中に出土した弥生土器甕の口縁部である。断面逆L字状を呈する。器面調整は内外面ともに磨滅しており不詳。色調は灰黄褐色を呈する。16は弥生土器甕の口縁部である。断面は逆L字状を呈する。器面調整は内外面ともに磨滅しており不詳だが、外面には板状工具の痕跡が若干残っている。色調は茶褐色を呈する。17は弥生土器壺の口縁部である。端部は平坦で、外反する。器面調整は内外面ヨコナデで、口縁端部にはキザミが施される。色調は暗黄褐色を呈する。18は弥生土器甕の底部である。底径6cm、底部の形態は平底である。器面調整は外面が縦方向のハケメ、内面はナデまたは工具痕が残る。色調は内面が灰黄茶色、外面が茶褐色を呈する。19は弥生土器甕の底部である。底径7cm、底部の形態は平底である。器面調整は内外面ともに磨滅しており不詳。色調は茶褐色を呈する。20は弥生土器甕の底部である。底径7.4cm、底部の形態はやや上げ底である。器面調整は内外面ともに磨滅しており不詳。色調は内面が灰黄褐色、外面が赤褐色を呈する。21は弥生土器甕の底部である。底径7.0cm、底部の形態は上げ底である。器面調整は外面が縦方向のハケメ、内面は磨滅しており不詳。色調は茶褐色を呈する。

出土石器（第14図）

石器は第5トレンチの検出時に出土した。

1は腰岳産黒曜石製の打製石鏃である。長さ3.5cm、残存幅2.1cm、厚さ0.5cmである。2は頁岩製の扁平片刃石斧である。残存長6.4cm、残存幅1.1cm、厚さ1.4cm。3は頁岩製の扁平片刃石斧である。残存長3.5cm、残存幅0.9cm、厚さ0.5cmである。



第14図 第5次調査出土石器実測図（1は2/3、2・3は1/2）

第3章 自然科学分析

大溝出土炭化物の放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である (中村, 2003)。

ここでは、三沢遺跡で出土した大溝の堆積年代を明らかにする目的で放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料は、3トレンチで検出された大溝の1層、5層、10層、11層、12層と小土坑より出土した炭化物6点である。表1に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

表1 測定試料及び処理

試料番号	出土遺構・層位	試料	前処理・調整	測定法
No.1	Tr. 3 大溝 1層	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS
No.2	Tr. 3 大溝 5層	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS
No.3	Tr. 3 大溝 10層	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AaA)	AMS
No.4	Tr. 3 大溝 11層	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS
No.5	Tr. 3 大溝 12層	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS
No.6	Tr. 3 大溝 小土坑	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AaA)	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

1) 化学処理

試料の付着物を取り除いた後、酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と結果表に記載する。

化学処理後の試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させ、真空ラインで二酸化炭素を精製する。精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

2) 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ

酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。 $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である。

3. 結果

加速器質量分析法 (AMS: Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。表 2 にこれらの結果を示し、図 1 に暦年較正結果 (較正曲線) を示す。

^{14}C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach, 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を結果表に示す。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.3\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 データベース (Reimer et al., 2020) を用い、OxCalv4.4 較正プログラム (Bronk Ramsey, 2009) を使用する。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明

表 2 測定結果

試料番号	測定No. (IAAA-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (年BP)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	
					1 σ (68.3% 確率)	2 σ (95.4% 確率)
No.1	201874	-29.10 \pm 0.20	387 \pm 22	390 \pm 20	1455 calAD-1496 calAD (57.8%)	1447 calAD-1521 calAD (72.5%)
					1601 calAD-1612 calAD (10.5%)	1585 calAD-1624 calAD (23.0%)
No.2	201875	-31.25 \pm 0.23	2389 \pm 25	2390 \pm 30	511 calBC-506 calBC (2.8%)	542 calBC-397 calBC (95.4%)
					481 calBC-402 calBC (65.4%)	
No.3	201876	-25.55 \pm 0.19	2263 \pm 24	2260 \pm 20	390 calBC-357 calBC (36.2%)	395 calBC-351 calBC (42.7%)
					279 calBC-256 calBC (19.3%)	296 calBC-208 calBC (52.8%)
No.4	201877	-25.83 \pm 0.23	2234 \pm 24	2230 \pm 20	372 calBC-351 calBC (14.1%)	385 calBC-346 calBC (22.3%)
					290 calBC-209 calBC (54.1%)	317 calBC-203 calBC (73.2%)
No.5	201878	-25.49 \pm 0.20	2275 \pm 24	2280 \pm 20	393 calBC-360 calBC (49.3%)	399 calBC-352 calBC (53.7%)
					275 calBC-263 calBC (11.1%)	290 calBC-209 calBC (41.7%)
No.6	201879	-16.09 \pm 0.25	2267 \pm 24	2270 \pm 20	391 calBC-357 calBC (39.5%)	396 calBC-351 calBC (46.0%)
					279 calBC-257 calBC (17.7%)	295 calBC-208 calBC (49.4%)
					246 calBC-233 calBC (11.1%)	

BP: Before Physics (Present), BC: 紀元前, AD: 紀元

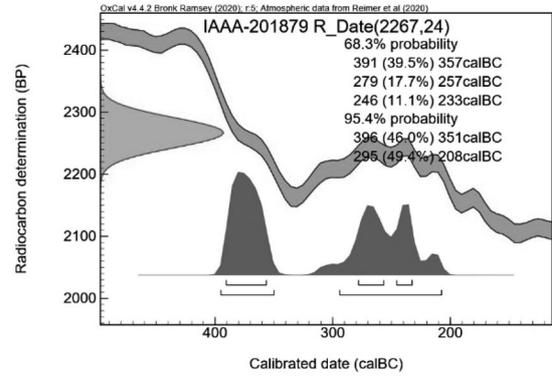
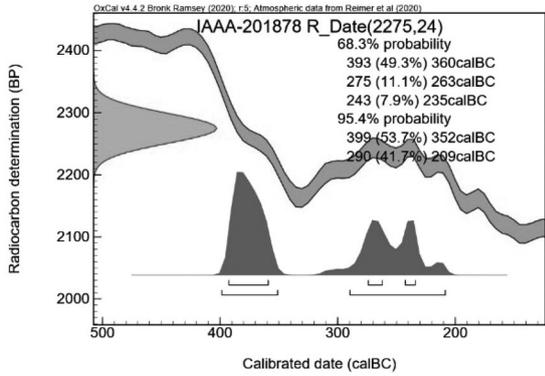
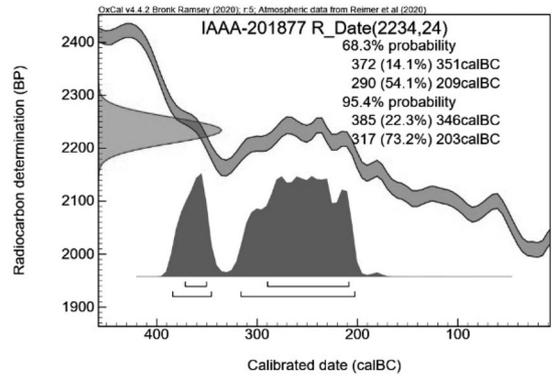
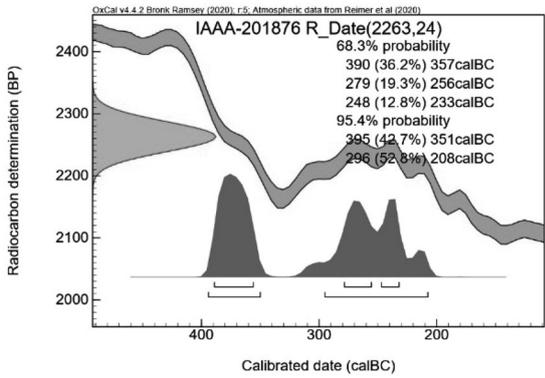
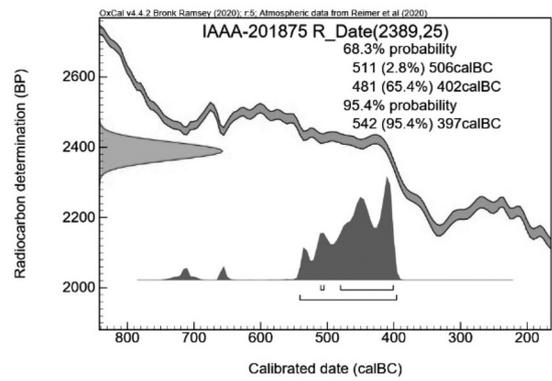
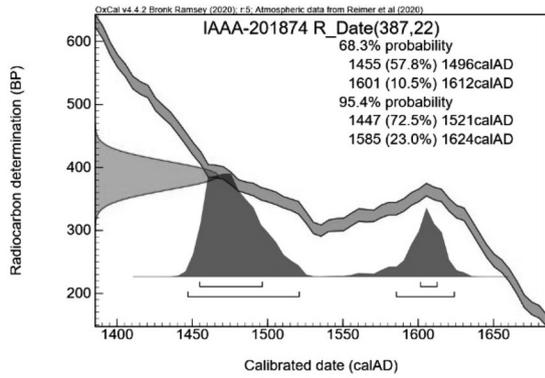
示するために「cal BC/AD」・「cal BP」という単位で表される。

4. 所見

三沢遺跡の発掘調査で検出された大溝の堆積年代を検討する目的で、出土した炭化物を対象として加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定を行った。その結果、1層で出土した炭化物は、補正年代が 390 ± 20 年 BP、 2σ の暦年補正值は 1447 calAD-1521 calAD (72.5%)、1585 calAD-1624 calAD(23.0%)、5層で出土した炭化物は、補正年代が 2390 ± 30 年 BP、 2σ の暦年補正值は 542 calBC-397 calBC(95.4%)、10層で出土した炭化物は、補正年代が 2260 ± 20 年 BP、 2σ の暦年補正值は 395 calBC-351calBC(42.7%)、296 calBC-208 calBC(52.8%)、11層で出土した炭化物は、補正年代が 2230 ± 20 年 BP、 2σ の暦年補正值は 385 calBC-346 calBC(22.3%)、317 calBC-203 calBC(73.2%)、12層で出土した炭化物は、補正年代が 2280 ± 20 年 BP、 2σ の暦年補正值は 399 calBC-352 calBC(53.7%)、290 calBC-209 calBC(41.7%)、小土坑で出土した炭化物は、補正年代が 2270 ± 20 年 BP、 2σ の暦年補正值は 396 calBC-351 calBC(46.0%)、295 calBC-208 calBC(49.4%) であった。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- Reimer, P. J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62 (4), 725-757
- Sakamoto, M., Imamura, M., van der Plicht, J., Mitsutani, T., Sahara, M.: *Radiocarbon calibration for Japanese wood samples. Radiocarbon*, 45 (1), 81-89, 200p.
- Stuiver, M. and Polach, H. A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-



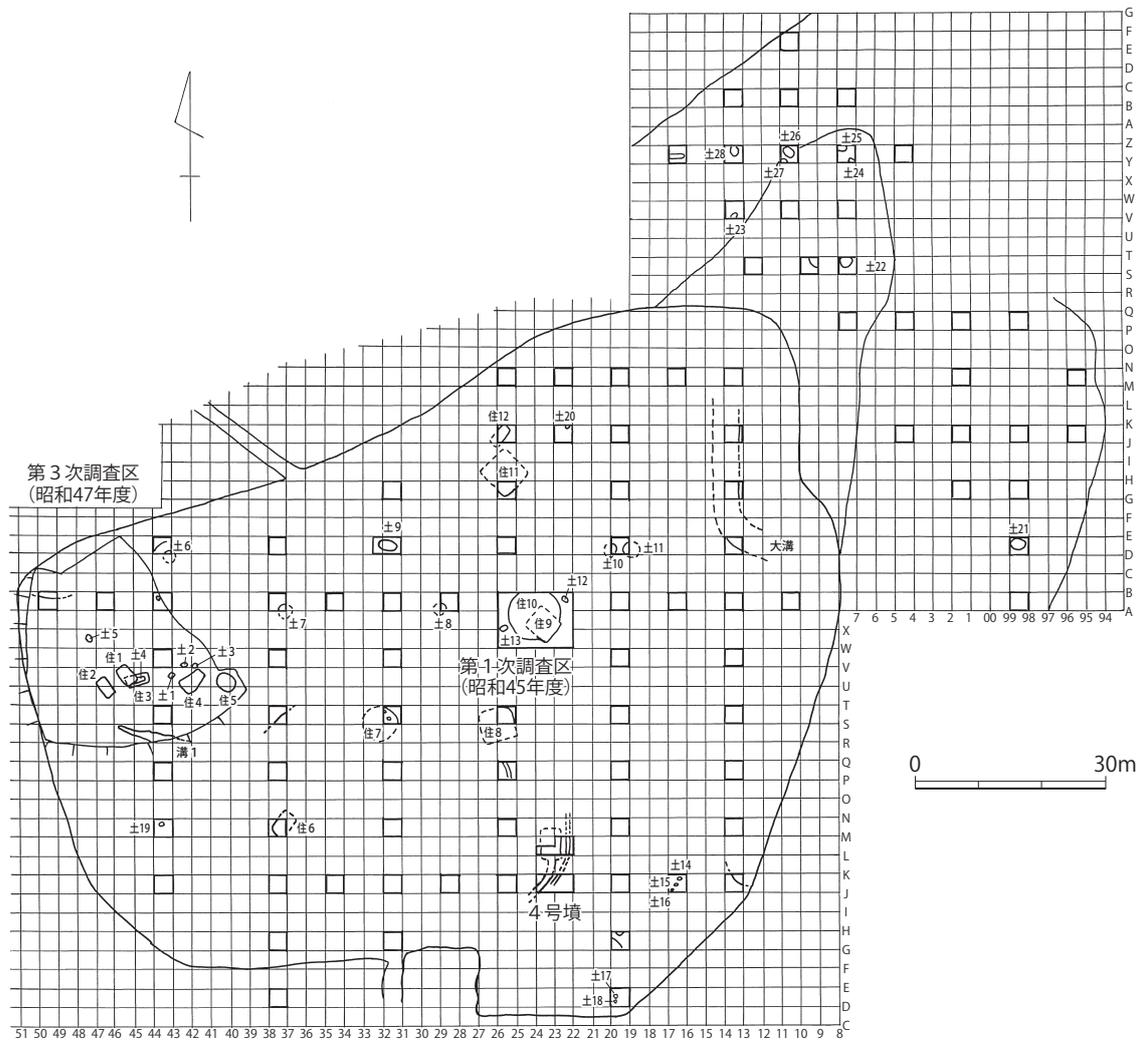
曆年較正図

第4章 昭和45・47年度の調査

(1) 調査の経過

三沢遺跡の既往の調査に関しては、福岡県教育委員会が刊行した『福岡県三沢所在遺跡調査概報』昭和46年3月（第1次調査）、『福岡県三沢所在遺跡予備調査概要』昭和46年9月（第1次調査・第2次調査）、『昭和47年度九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報』昭和48年3月（第3次調査）に概要を報告している。以下、抜粋しつつ経過を記しておく。

昭和45年（1970）の夏、九州縦貫道予定地の発掘調査が急ピッチで進められていた。9月上旬に至り、今後の調査計画の協議のために日本道路公団福岡支社久留米工事事務所を訪れた際、土取場の一つとして福岡県種畜場（三沢遺跡）が予定地となっていることがわかった。そこで10月26日から27日に福岡県教育庁文化課（現文化財保護課）酒井仁夫が踏査を実



第15図 昭和45・47年度調査遺構配置図 (1/1,200)

施し、その結果、山林の中に円墳1基を確認した。

その後、同年12月16日に久留米工事事務所との九州縦貫道関係事業協議の場において、種畜場内での土取工事の具体的な内容を知らされることとなった。これを受け、年が明けた昭和46年(1971)年1月22日から2月20日(第1次調査)と、昭和46年(1971)5月7日から7月1日(第2次調査)にかけて、別府大学の賀川光夫教授指導のもと、福岡県教育庁文化課の西谷正、栗原和彦、酒井仁夫が事前の確認調査を行った。第1次調査はグリッド調査による遺構の状況の確認、第2次調査は吉本堯俊、後藤直、西谷正が担当し、「高峠」と呼ばれる最も高い丘陵部における2基の古墳(種畜場1号墳・2号墳)の完掘とその下部の弥生時代遺構の広がりを確認した。調査面積は第1次調査が3m方眼のグリッド411箇所3,699㎡、第2次調査が2,908㎡である。

こうした事前調査を受け、三沢遺跡は弥生時代の単位集団を示す遺跡として貴重であるとの認識のもと、開発主体である日本道路公団と保存協議がなされたが、やむを得ず保存を断念せざるを得なかった丘陵西側の部分1,078㎡について、昭和47年8月8日から9月6日にかけて記録保存のための発掘調査を実施した(第3次調査=九州縦貫自動車道関係65地点)。この調査において検出した遺構は、弥生時代中期初頭から中期前半代にかけての竪穴住居跡6軒と貯蔵穴3基、古墳(4号墳)、その他ピット多数である。

ここで調査区の設定について記述しておく。第1次調査、第2次調査に関しては、丘陵あるいは斜面ごとに独立の地区を設定し(A~T・中地区)、磁北に合わせた東西南北の軸線に沿う3m方眼を単位としている(小地区)。そして南北の軸線を東から数字で、東西の軸線を南からアルファベットで示した。つまり中地区と小地区の組み合わせが4桁の記号と数字で表されることになる(例:JC31→J地区のC31の区画、第15図)。

三沢遺跡は「高峠」と呼ばれる標高47mの最高所を含む丘陵(A丘:第2図参照)と、そこから東に派生する尾根上(C丘・D丘)に遺跡が展開する。このうち本報告では、令和元年度・2年度の調査区と重複するA丘(高峠を除く)のうちI区・J区及びJ区に隣接するA丘北東部緩斜面部のQ区の調査結果について記述する(第1次調査、第3次調査)。報告は公刊された概要報告と当時の記録類に基づいて行ったが、遺構や出土遺物の詳細が明らかにしえない状況が多く含まれた内容であることをご了解願いたい。

(2) 検出遺構

既往の調査において確認された遺構は、竪穴住居跡12棟(小形の住居状遺構を含む)、土坑28基、溝状遺構1条、大溝1条、落ち込み1基、古墳1基である。第1次調査・第2次調査時には遺構番号が付されていないため、第3次調査で検出された1~5号竪穴住居跡及び1~6号ピットと付された番号を踏襲し、それらに続けて遺構番号を新たに付した。なお、昭和45・47年度の調査時に「ピット」としたものについては、規模・形状から今回は「土坑」としている(貯蔵穴も含む)。遺構配置図(第15図)に形状が記された遺構のうち個別図を掲載していないものの多くは確認調査時に平面形状の検出のみを行ったものであるが、一部、

完掘しているにもかかわらず個別図面を掲載できなかったものも含まれている。またレベルについては基準点が明らかでないため、いずれも標高を記していない。大まかな高さは第2図の等高線を参照いただきたい。

なお、出土遺物に関しては、第1次調査概要報告の記載および第3次調査が全面発掘であることを考えると、さらに多くの遺物が出土しているものと思われるが、今回は帰属を確認し得たもののみ掲載する。

1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版16、第16図）

丘陵の北西端部で検出した。平面形状は長方形で、規模は長辺長3.18 m、短辺長2.15 m、深さ0.65 mを測る。南東部は3号竪穴住居跡と重複し、3号住居跡を切る。後述する2号・3号・12号住居跡とともに一般的な住居と比べて規模が小さく、また支柱穴も伴わず、炉跡も確認できないなど、住居とは異なる機能を考えたほうがよいのかもしれない。第3次調査。床面より磨石が出土。

出土土器（図版18、第17図）

1～4は甕。いずれも口縁端部外面に粘土紐を貼付する亀ノ甲タイプ。1～3のように断面三角形になるものと、4のように断面が台形状の二種がみられる。2の口縁下には沈線が巡る。調整はいずれも不明。5～7は壺。5は広口壺の口縁部で、鋤先形になるもの。6は小型。7は広口壺の胴部の小破片で、須玖式に通有の断面M字形の突帯を貼付する。外面の調整は横方向のミガキ。

2号竪穴住居跡（図版16、第16図）

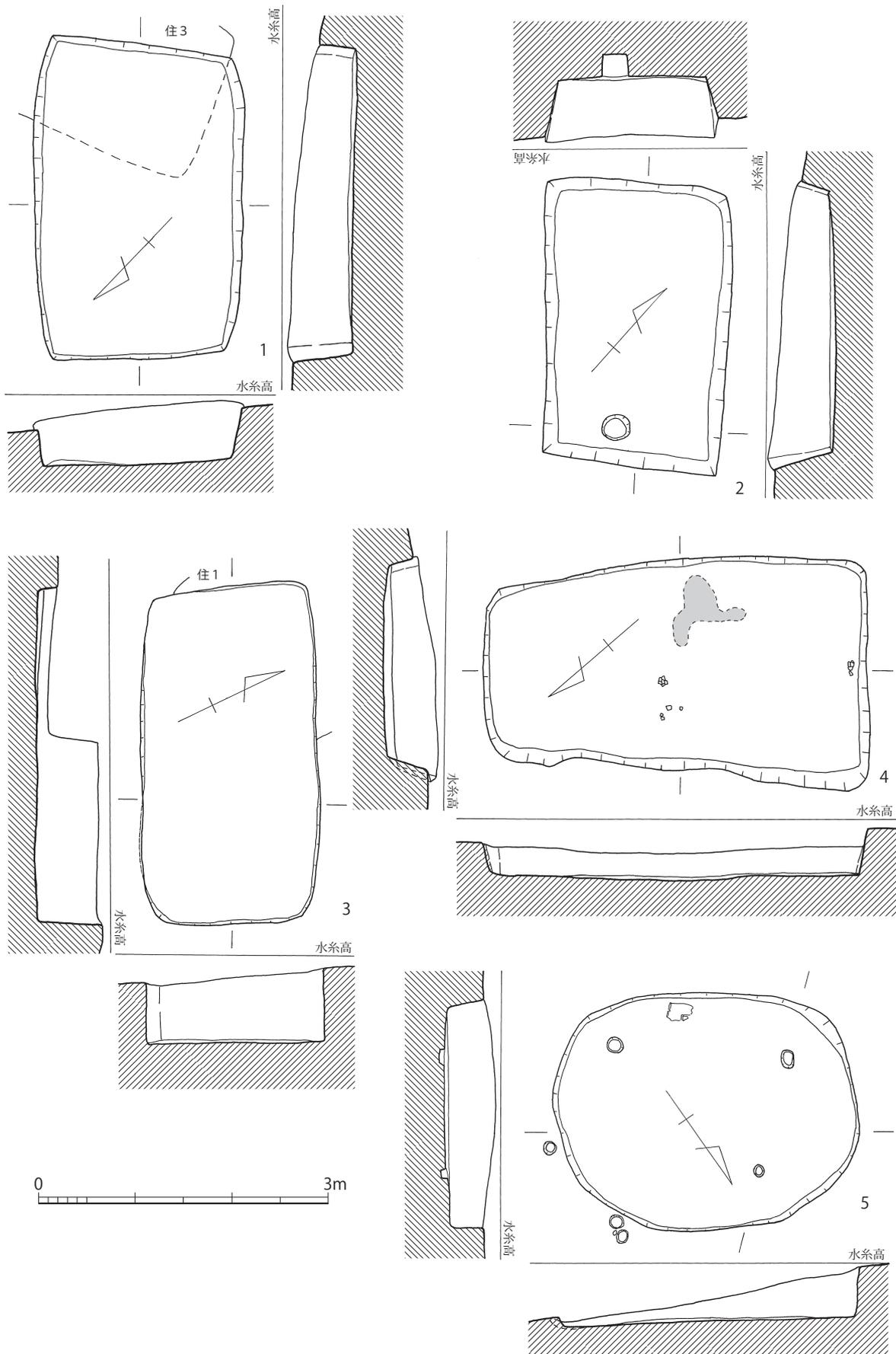
丘陵の北西端部で検出し、1号住居跡の西側に位置する。平面形状は長方形で、規模は長辺長3.00 m、短辺長1.93 m、深さ0.72 mを測る。南東部壁際近くに径30cmほどのピットがある。石鏃・磨石が出土。第3次調査。

3号竪穴住居跡（図版16、第16図）

丘陵の北西端部で検出した。平面形状は隅丸長方形である。規模は長辺長3.56 m、短辺長1.85 m、深さ0.75 mを測る。北東部を1号住居跡に切られ、また4号土坑にも切られる。第3次調査。

4号竪穴住居跡（図版16、第16図）

丘陵の北西端部で検出した。平面形状は長方形で、南西部側の短辺が長く台形状となる。規模は長辺長3.96 m、短辺長1.80～2.00 m、深さ0.54 mを測る。中央部東寄りの70～80cmの範囲に炭層が広がる。また、中央部床面では土器が集中して出土した。第3次調査。



第 16 图 1 ~ 5 号竖穴住居跡実測图 (1/60)

出土土器（第 17 図）

8 は壺の底部。平底。調整は不明。

5号竪穴住居跡（第 16 図）

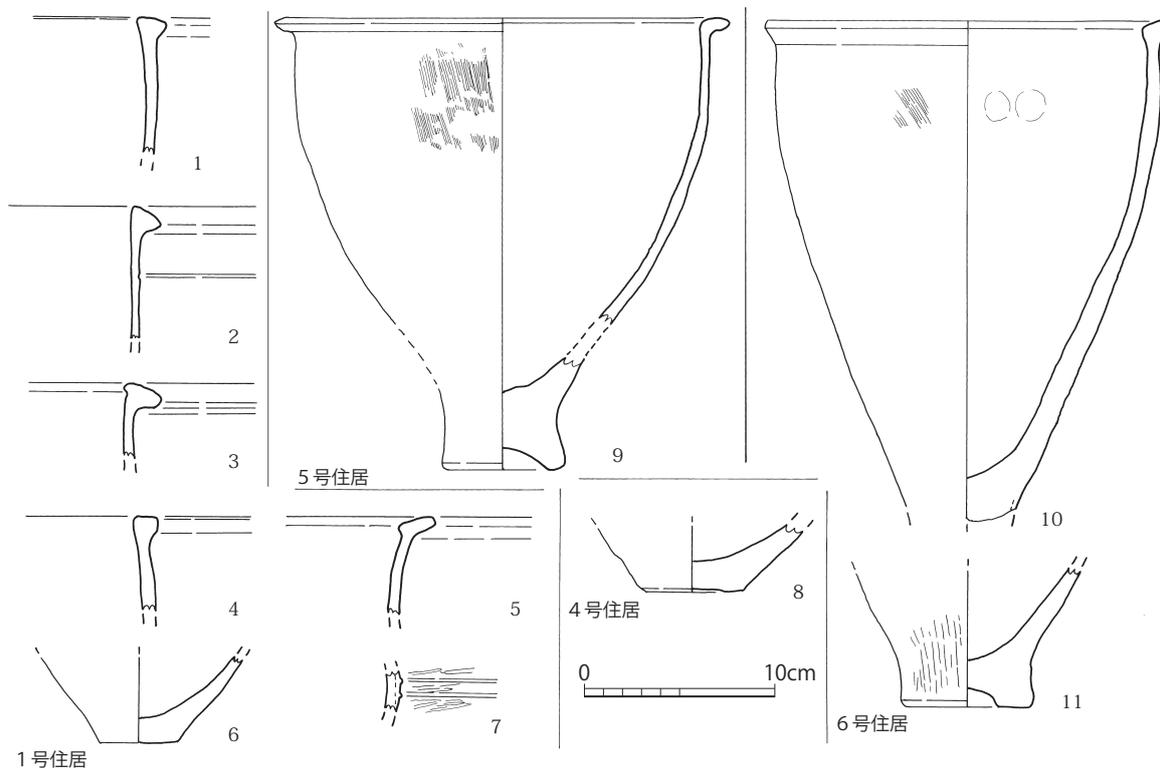
丘陵の北西端部で検出した。4号住居跡の東側に位置する。平面形状は小判形である。規模は長軸長 3.18 m、短軸長 2.47 m、深さ 0.55 m を測る。床面の 3箇所 で径 10～15cm のピットが確認されたが、いずれも 5 cm～10 cm ほどと浅く、また配置に規則性がないため支柱穴とは考え難い。第 3 次調査。

出土土器（図版 18、第 17 図）

9 は逆 L 字形の口縁で、底部は上げ底。調整は外面が縦方向のハケメ。

6号竪穴住居跡（第 15 図）

丘陵の南西部で検出した。平面形状は隅丸長方形である。平面形状の確認のみ。未完掘。第 1 次調査。



第 17 図 竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

出土土器（図版 18、第 17 図）

10・11 とも甕。10 の口縁は亀ノ甲タイプ。11 の底部は上げ底。調整は外面が縦方向のハケメ。

7 号竪穴住居跡（第 15 図）

丘陵の中央部で検出した。平面形状は円形で直径は 6 m に満たない。平面形状の確認のみ。第 1 次調査。

8 号竪穴住居跡（第 15 図）

丘陵の中央部で検出した。北東隅部のみを確認し、平面形状は方形ないしは長方形と考えられる。未完掘。第 1 次調査。

9 号竪穴住居跡（第 15 図）

丘陵の中央部で検出した。グリッドを拡張して平面プランを確認した。平面形状は長方形とみられ、10 号住居跡を切る。第 1 次調査。

10 号竪穴住居跡（第 15 図）

丘陵中央部で検出した。平面形状は円形で、径 7 m ほどと大型の類である。9 号住居跡に切られる。第 1 次調査。第 4 次調査の 1 号竪穴住居跡に該当するものと思われる（12 頁）。

11 号竪穴住居跡（第 15 図）

丘陵北部で検出した。南東部のみを確認し、平面形状は方形ないしは長方形と考えられる。未完掘。第 1 次調査。

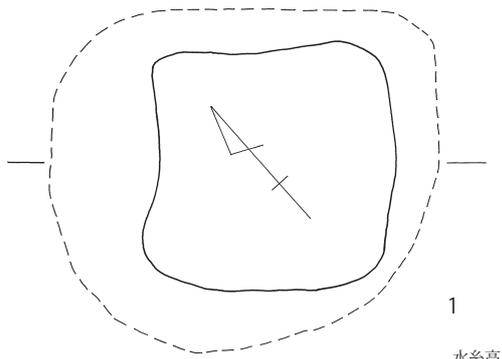
12 号竪穴住居跡（第 15 図）

丘陵北部、11 号住居跡の北側で検出した。詳細は詳らかではないが、規模・形状とも 2 号住居跡に似る。未完掘。第 1 次調査。

2) 土坑

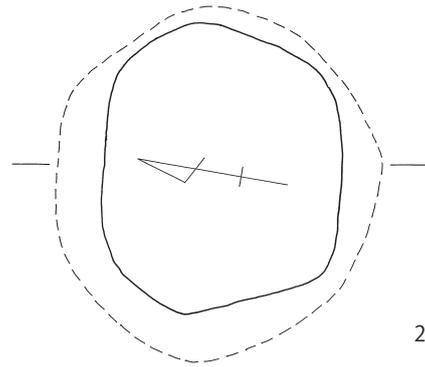
1 号土坑（図版 16・17、第 18 図）

丘陵北西端部で検出した袋状貯蔵穴。平面形状は隅丸正方形。規模は上端が 0.95 m × 0.95 m、下端が 1.36 m × 1.52 m、最大幅 1.62 m、深さ 1.30 m を測る。上層（3 層）の中央部から完形の石戈が、埋土中から柱状片刃石斧、太型蛤刃石斧、石戈、台石が出土した。第 3 次調査。



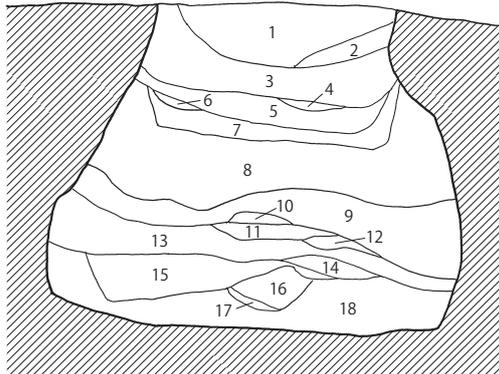
1

水系高



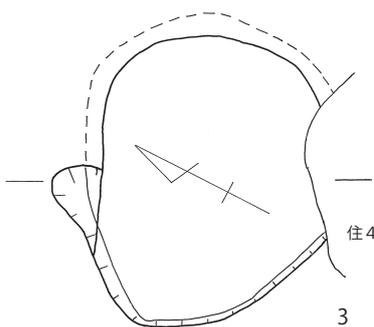
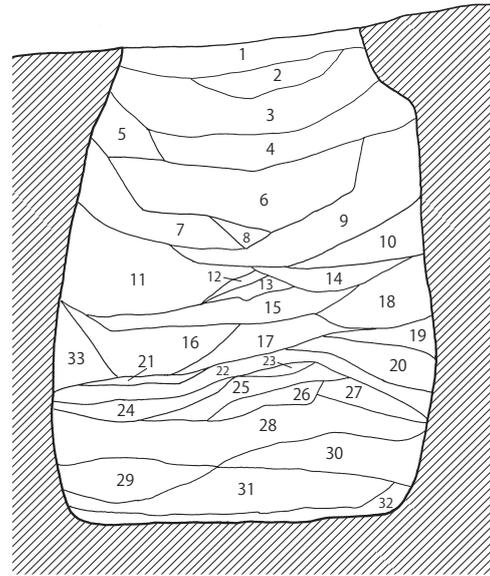
2

水系高



- 1 淡赤黄色砂質土
- 2 混赤斑淡赤黄色砂質土
- 3 赤黄色土 (若干炭化物混)
- 4 淡黄色砂質土
- 5 暗黒灰色土 (多量炭化物混)
- 6 黄赤褐色砂質粘土
- 7 赤褐色砂質粘土
- 8 黄褐色土 (若干炭化物混)
- 9 暗赤褐色細砂質土
- 10 明黄褐色土
- 11 黄褐色土
- 12 暗黄褐色砂質土
- 13 赤茶色土 (炭化物混)
- 14 暗黄色土
- 15 明赤褐色粘土
- 16 黄赤褐色粘土
- 17 黒茶色粘土
- 18 淡黄色微砂質土

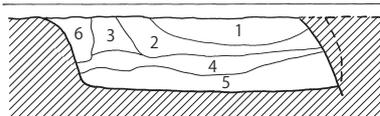
- 1 黄淡茶褐色砂質土
- 2 淡赤褐色粘質土
- 3 黄淡茶褐色粘質土
- 4 赤斑淡茶褐色粘質土
- 5 明赤褐色粘質土
- 6 淡茶褐色粘質土 (若干炭化物混)
- 7 赤褐色砂質粘土
- 8 淡赤褐色粘質土
- 9 赤斑淡茶褐色粘質土
- 10 赤淡黄褐色粘質土
- 11 赤斑黄褐色砂質粘土
- 12 茶褐色粘質土
- 13 淡黄褐色粘質土
- 14 淡黄褐色砂質粘土
- 15 暗黄褐色粘質土 (炭化物混)
- 16 茶斑淡赤褐色粘質土
- 17 茶及び赤斑黄褐色砂質粘質土
- 18 黄斑暗赤褐色粘質土
- 19 暗茶褐色粘質土 (若干炭化物混)
- 20 暗黄斑茶褐色粘質土
- 21 赤斑暗茶褐色粘質土
- 22 暗茶褐色粘質土 (多量炭化物混)
- 23 暗黄斑暗茶褐色砂質粘質土
- 24 黄斑黒褐色粘質土 (多量炭化物混)
- 25 暗茶斑暗黄褐色粘質土
- 26 暗赤斑暗茶褐色粘質土
- 27 赤斑茶褐色粘質土
- 28 淡黄及び赤斑暗茶褐色粘質土
- 29 黒茶褐色粘質土
- 30 暗茶褐色砂質粘土
- 31 暗茶褐色砂質土
- 32 暗赤褐色粘質土
- 33 暗黄茶褐色粘質土



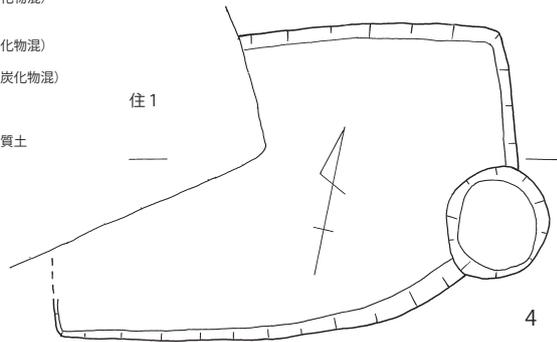
住4

3

水系高



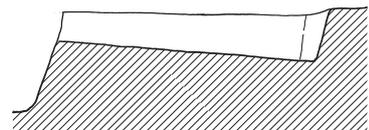
- 1 暗黄褐色粘質土
- 2 淡赤褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 茶褐色粘質土 (炭化物混)
- 5 暗赤褐色粘質土
- 6 赤褐色粘質土 (小ピット)



住1

4

水系高



第 18 図 土坑実測図 (1/30)

2号土坑（第18図）

丘陵北西端部で検出した袋状貯蔵穴。平面形状は円形。断面形状は1号土坑がフラスコ形となることと異なって側壁の立ち上がりは直に近く、上部でオーバーハングしてすぼまる。規模は上端が1.16 m×0.94 m、下端は1.41 m×1.29 m、最大幅1.50 m、深さ1.95 mを測る。第3次調査。

出土土器（第19図）

1～6は甕。1・2・4は口縁が断面三角形の亀ノ甲タイプ。2は胴が張る。4は粘土帯を貼付した際の指頭圧痕が口縁部内面に残る。3は逆L字形。5・6は底部。5は上げ底の形態を遺した平底、6は上げ底である。調整の外面はいずれも縦方向のハケメ。

3号土坑（第18図）

丘陵北西端部で検出した。平面形状は楕円形。南側を4号住居跡に切られる。規模は上端が1.10 m×0.94 m、下端が1.23 m×0.9 mを測る。第3次調査。

出土土器（第19図）

7は如意形の甕の口縁。壺になる可能性もある。8は口縁部が断面三角形になる甕で、胴部上位に沈線が巡る。調整は縦方向のハケメ。9は壺で頸部と体部の境に断面三角形の突帯を巡らせる。突帯の内面には指頭圧痕が残る。底部は円盤状になる。調整は外面が斜方向のハケメ、内面は磨滅が著しいが、ナデと思われる。

4号土坑（第18図）

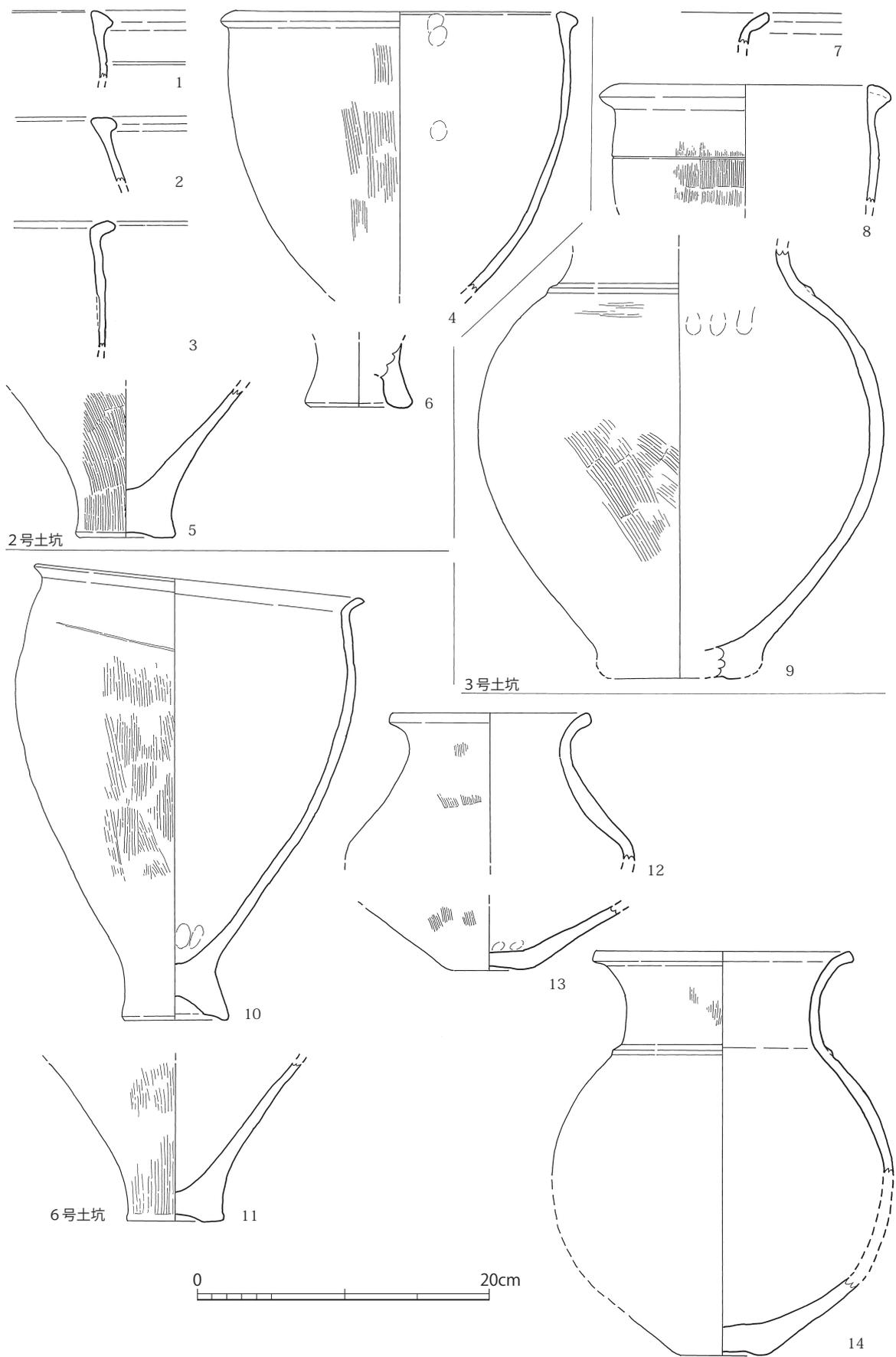
丘陵北西端部で検出した。平面プランは長方形で南東隅は丸味をおびる。北西隅部は1号住居跡に切れ、3号住居跡を切る。規模は上端が1.84 m×1.31 m、下端が1.77 m×1.10 m、深さ0.21 mを測る。土器のほか石庖丁が出土。第3次調査。

6号土坑（第15図）

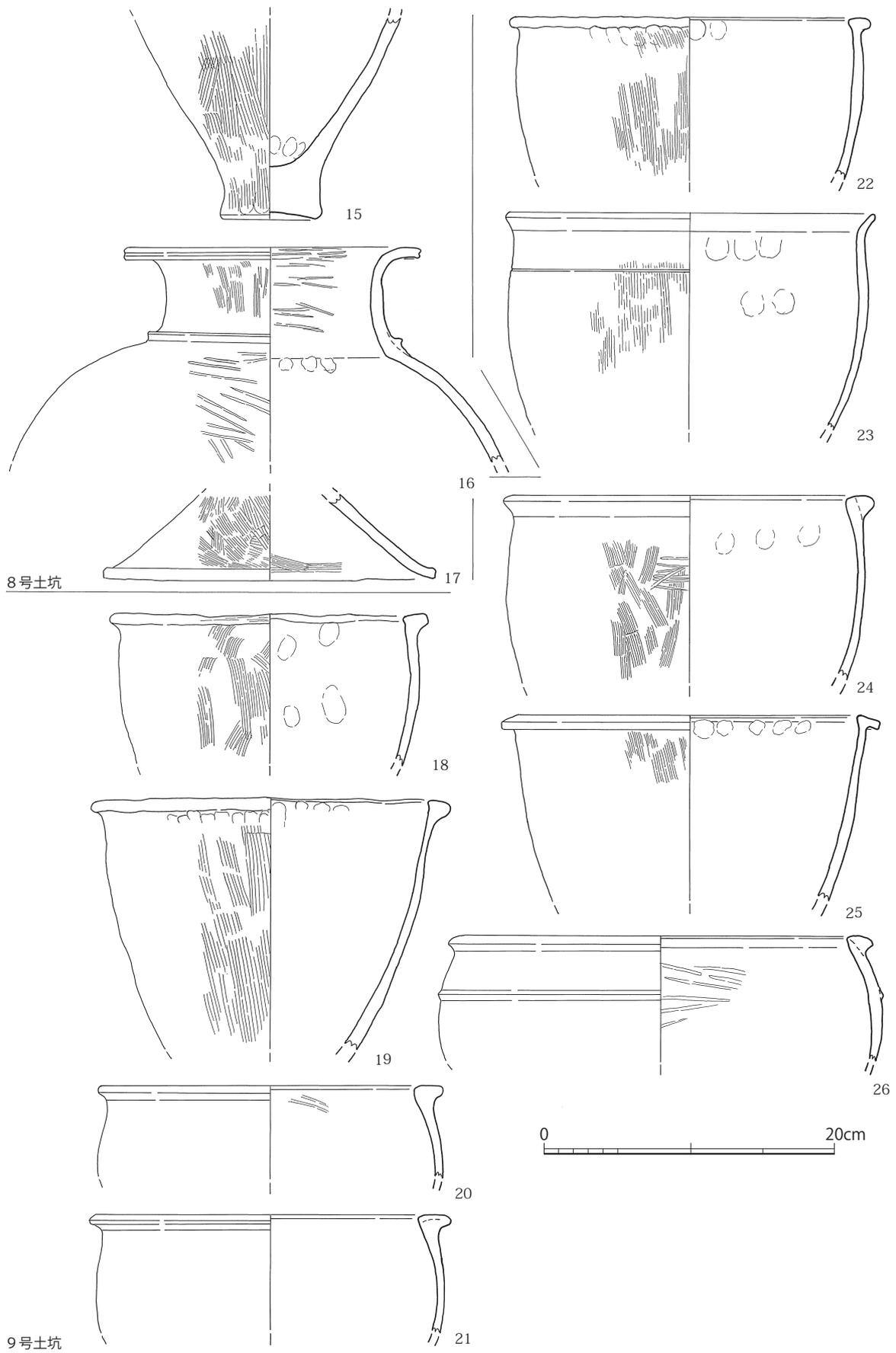
丘陵北西部で全体の1/4ほどを検出した。平面プランは円形と思われる。

出土土器（第19図）

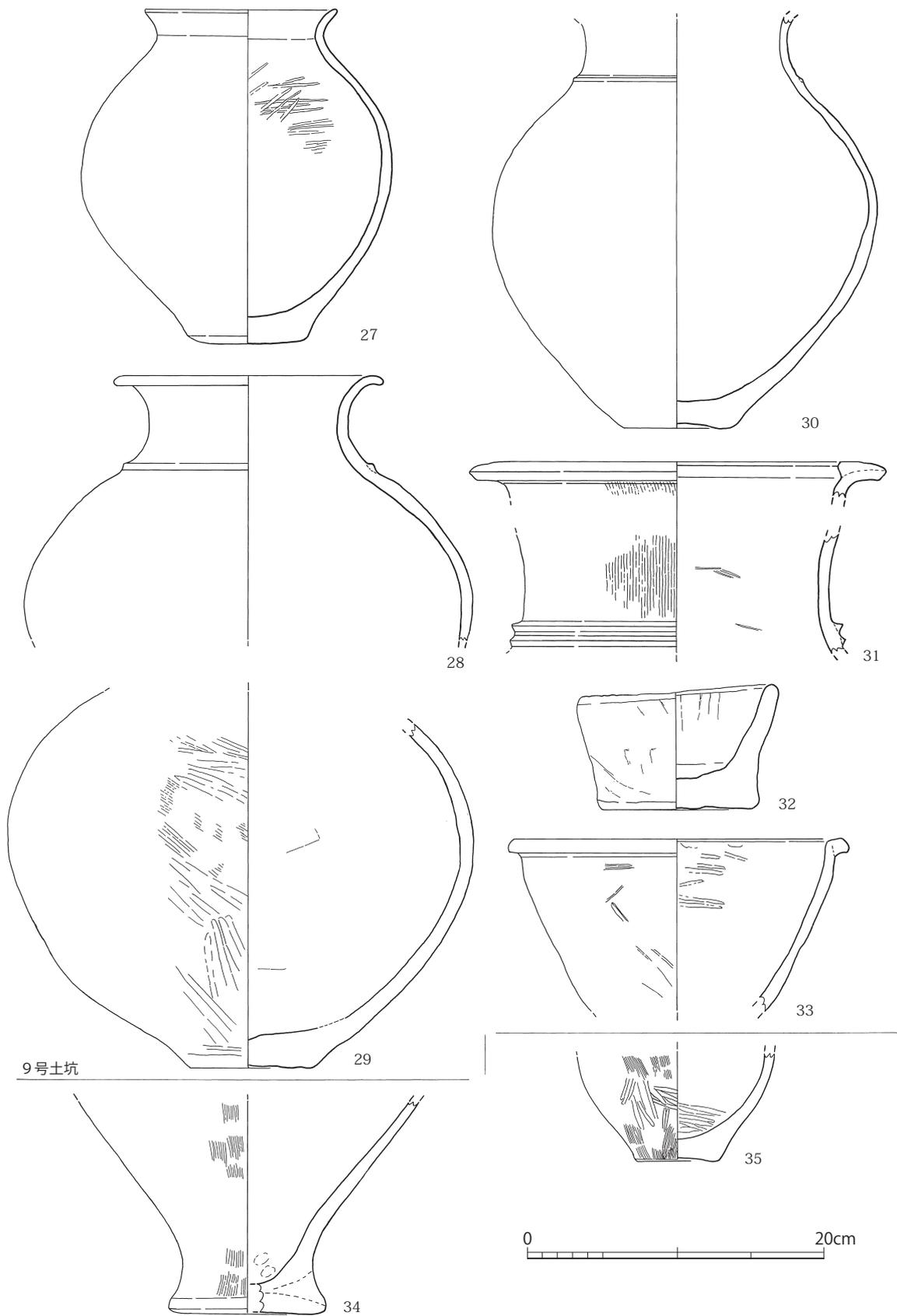
10・11は甕。10は口縁部が屈曲して外反するもの。胴部上位に沈線を巡らす。上げ底。調整は外面が縦方向のハケメ、内面は調整不明だが、底部には指頭圧痕が残る。法量は口径22.8cm、底径7.4cm、器高31.6cm。12・13は壺。同一個体である可能性が高い。口縁部は外反しながら開き、肥厚する。肩も比較的明瞭で、全体的なプロポーシオンは板付Ⅱ式の流れを残す。14は球形の体部に外反する口縁がつくもの。頸部と体部の境には断面三角形の低い突帯が巡る。底部は上げ底気味の平底。法量は復元口径18.0cm、復元胴部最大径23.4cm、



第19图 土坑出土土器实测图1 (1/4)



第 20 图 土坑出土土器实测图 2 (1/4)



23号土坑

第 21 图 土坑出土土器实测图 3 (1/4)

器高 28.0cm。

8号土坑（第 15 図）

丘陵の中央部で全体の 1 / 4 ほどを検出した。平面プランは円形と思われる。

出土土器（第 20 図）

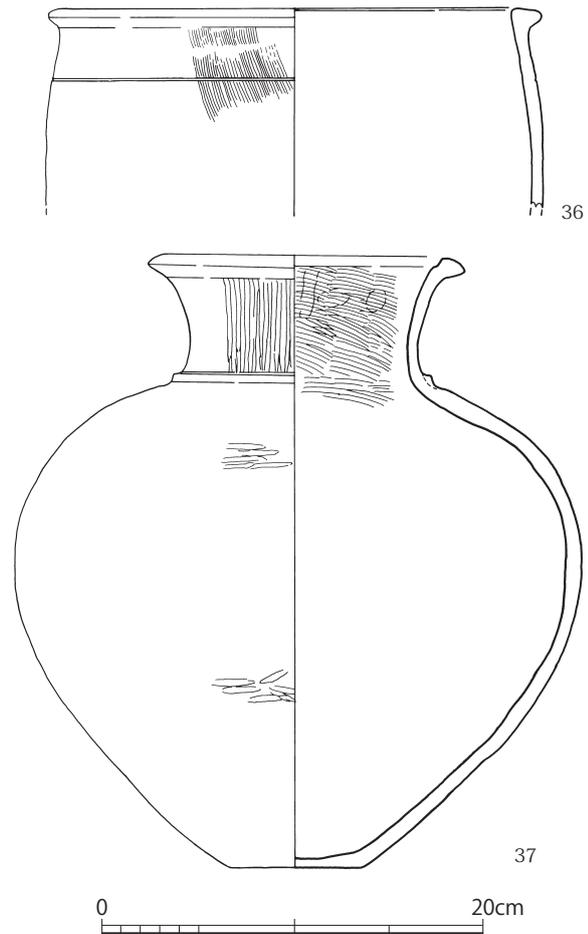
15 は甕。わずかに上げ底となる。調整は外面が縦方向のハケメ。底部内面には指頭圧痕が残る。16 は壺。球形の体部に強く外反する口縁がつく。頸部と体部の境には断面三角形の突帯が巡る。調整は頸部外面がハケメ、頸部内面と体部外面は横方向のミガキ。17 は蓋。調整は内外面ともにハケメ。

9号土坑（第 15 図）

丘陵の中央部北側で検出した長円形の土坑。長軸長は 3 m 程度。

出土土器（図版 18、第 20・21 図）

18～26 は甕。プロポーションは 19 のように底部から直線的に開くもの、20・21 のように胴が張るものがある。口縁部には如意形になるもの、断面三角形ないしは台形の粘土紐を貼付するもの、鋤先形になるものがある。23 の胴部上位には沈線が巡る。26 には断面三角形の低い突帯が巡る。鉢形になるか。調整は外面が縦方向のハケメ、内面はナデで、内面には指頭圧痕が残るものもある。26 の内面は横方向のミガキ。口径は 22.1～29.4cm。27～31 は壺。いずれも球形の体部に外反する口縁がつくもの。27・28 は口縁部が強く外反し端部は丸く収める。28・30 の頸部には断面三角形の突帯が巡る。31 は広口壺で口縁が鋤先形となる。頸部と体部の境に M 字形の突帯を貼付する。27・31 の内面と 29 の内外面はミガキ。その他はナデか。32 は



第 22 図 土坑出土土器実測図 4 (1/4)

手捏ねの小形の鉢。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く収める。器壁が分厚い。口径 13.7cm、底径 11.0cm、高さ 7.2～8.5cm。

23 号土坑（第 15 図）

丘陵の北東部緩斜面で一部を検出した。グリッド外に広がるためプランはわからない。

出土土器（第 21 図）

34 は甕。平底。外面の調整は縦方向のハケメ。35 は小形の壺。調整は内外面ともにミガキだが、外面には一部ハケメが残る。

28 号土坑（第 15 図）

丘陵北東部緩斜面で検出した。平面プランは楕円形。

出土土器（図版 18、第 22 図）

36 は甕。口縁下に沈線を巡らす。調整は縦方向のハケメ。37 は壺。肩の張った体部に外反しながら立ち上がる口縁がつく。口縁端部を外方につまみ出し、内面には沈線状の窪みを巡らす。調整は頸部外面が暗文風の縦方向のミガキ、体部外面は横方向のミガキ、内面は頸部が横方向のハケメ、体部はナデ。法量は口径 16.8cm、胴部最大径 32.2cm、器高 32.5cm。

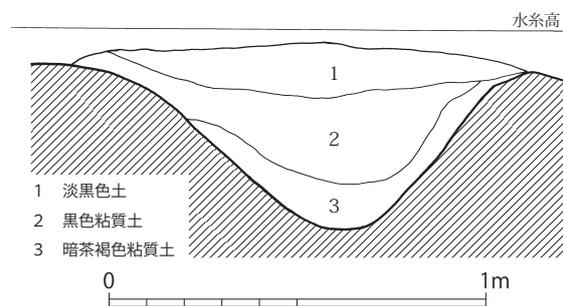
その他の土坑（第 15 図）

調査区の全域において径 1.5～2 m ほどの円形もしくは長円形の土坑を確認しているが、平板測量によりその位置とプランが知れるのみである（第 15 図）。

3) 溝

1 号溝状遺構（図版 17、第 15・23 図）

丘陵の北西部で検出した東西方向に走る溝。東側は土取りによって削られている。長さ 5.3 m 分を確認した。上端幅 1.2 m、下端幅 0.18～0.45 m、深さ 0.50 m を測る。断面形状は V 字形。溝底のレベル差は東側と西側で 1.2 m ほどあり、東に傾斜している。埋土は黒色の粘質土で、ほかの弥生時代の遺構の埋土とは異なる。第 1 次調査。



第 23 図 1 号溝断面図 (1/20)

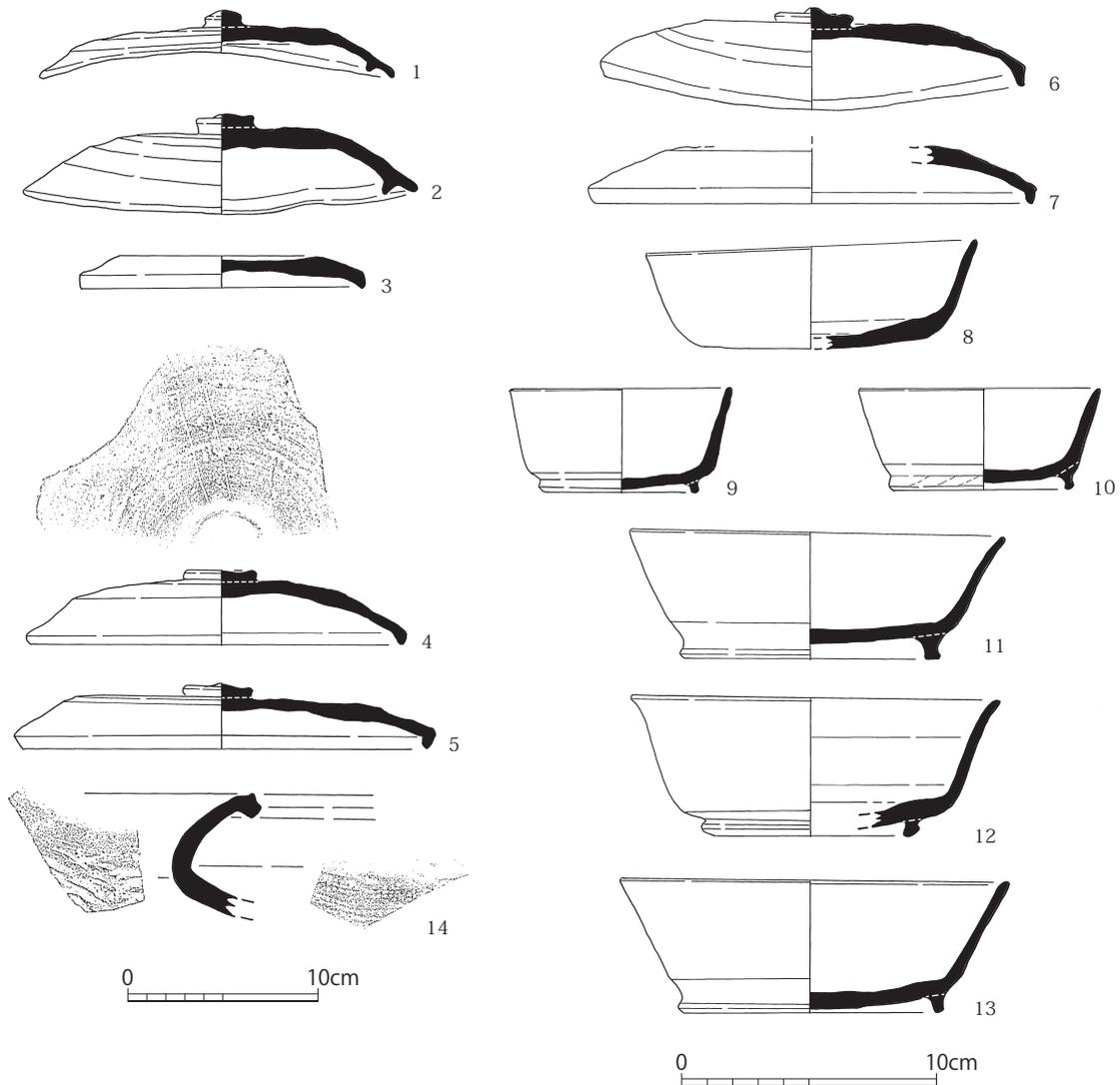
大溝（第 15 図）

丘陵の北東部を地形に沿うように走る溝。道路跡と考えられる。第 1 次調査において長さ 24 m ほどを検出した。詳細は令和の調査報告を参照のこと（17・18 頁）。埋土からは大量の弥生土器や石庖丁が出土している。

4) 古墳

4号墳（第 15 図）

丘陵の南部で検出した横穴式石室の掘方と墓道。石室の掘方の主軸はほぼ南北方向で、石室は南に開口する。掘方の規模は概数値で長軸 5 m、短軸 3 m あまりである。墓道は掘方の中央から南に 2 m ほど延び、さらにカーブを描きながら南西方向に続いている。掘方と墓道の東側にはこれに沿うような溝があるが、関係性についてはわからない。墓道から完形の須恵器が多く出土した。第 1 次調査。未完掘。



第 24 図 4号墳出土土器実測図（14は 1/4、他は 1/3）

出土土器（図版 19、第 24 図）

いずれも須恵器。1～7は坏蓋。かえりをもつ1・2と口縁端部が嘴状に下方に長く伸びる4～7がある。3の口縁端部は断面三角形に近い。3にはつまみがない。調整は天井部外面は3を除き回転ヘラケズリ、内面はヨコナデ後ナデ。法量は11.2～17.2cm。1・2・6は歪みが著しい。4の天井部にはヘラ記号が施される。8～13は坏身。8が無高台。ほかは高台が付く。いずれも体部と底部との境が緩やかで、9・10・13の体部は直線的に、11・12は外反しながら立ち上がる。高台は長めの断面四角形で、しっかり踏ん張る。法量は小形の9・10の口径が8.7cm・9.4cm、高台径6.4cm・7.4cm、器高4.1cm・4.0cm。11～13はそれぞれ口径14.8～15.3cm、高台径8.6～10.4cm、器高4.8～5.3cm。14は甕の口縁部の小破片。6が玄室内埋土、8が表土、その他は墓道から出土した。なお、土器の注記には「溝内」とあるものも一部含まれるが、出土地区が墓道を検出したグリッドにあたることから墓道出土と一括して報告する。

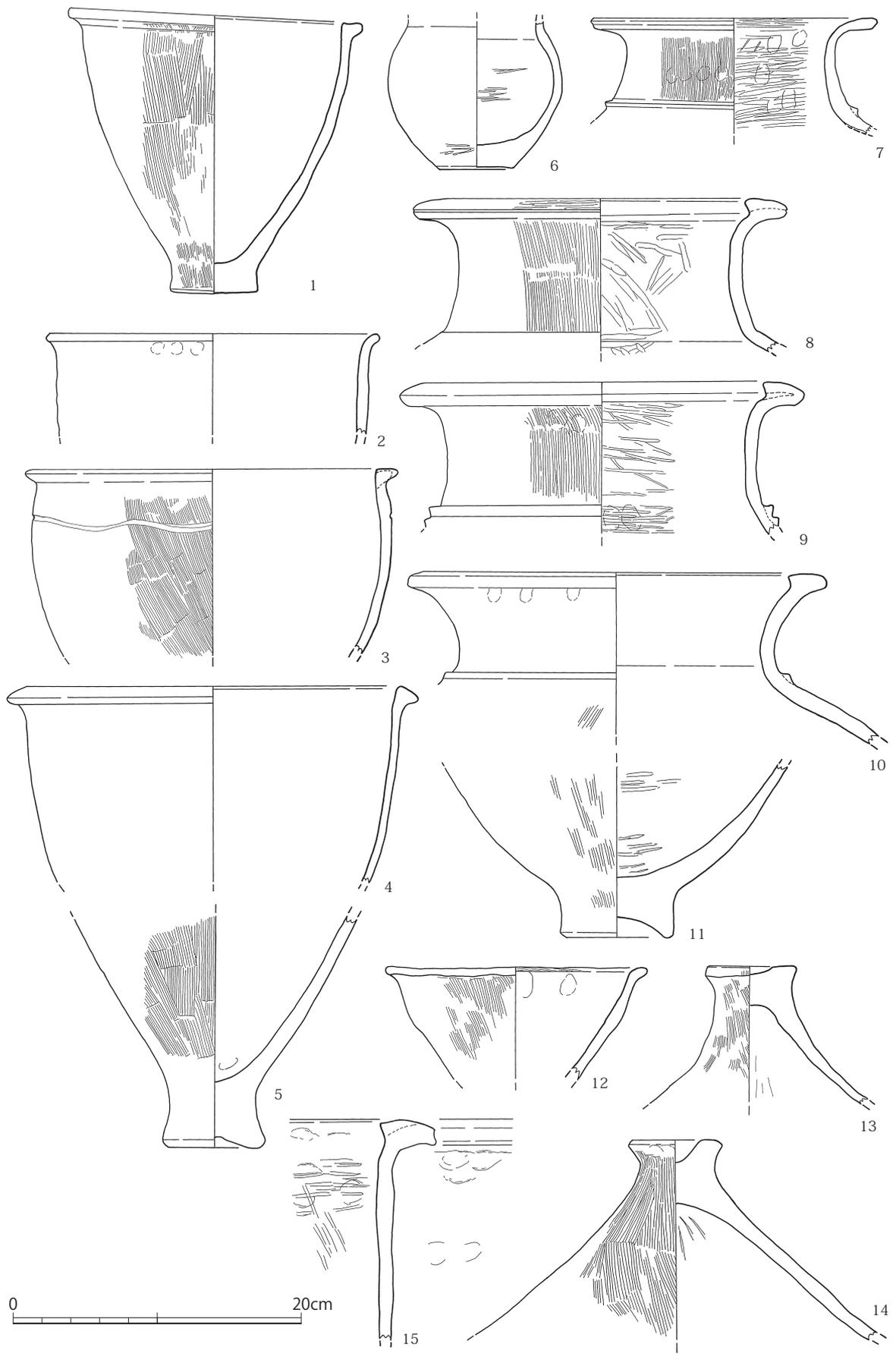
5) その他の遺構・層位出土土器（図版 19、第 25 図）

ここでは各グリッド等から出土したが遺構が特定できないものや層位出土の遺物を記載する。1～5は甕。2は板付式系統の如意形口縁。6～11は壺。6は小形の壺。調整は内外面ともにミガキ。胴部最大径12.4cm。7は口縁部が大きく外反する。頸部と体部の境に断面三角形の突帯を巡らす。調整は頸部外面が縦方向のハケメ、内面は横方向のミガキ。8～10は口縁部が鋤先形になるもの。9は断面M字形の突帯を、10は断面三角形の突帯を巡らす。11は壺の底部。上げ底。調整は内面に横方向のミガキが施されている。12は傾きに不安が残るが、この傾きと考えれば鉢形になる。調整は外面が縦方向のハケメ、内面はナデ。器壁の厚さが一定していない。13・14は蓋。いずれも調整は外面が縦方向のハケメ、内面はナデ。15は甕棺。口縁部は逆L字形を呈する。外側の端部は面をなし、内側の端部はつまんで稜をなす。外面の調整は磨滅や剥離によりわからないが、内面は横方向のミガキ。7号住居跡付近から出土した。なお、第1～3次調査においては弥生時代の墓域は確認されていない。

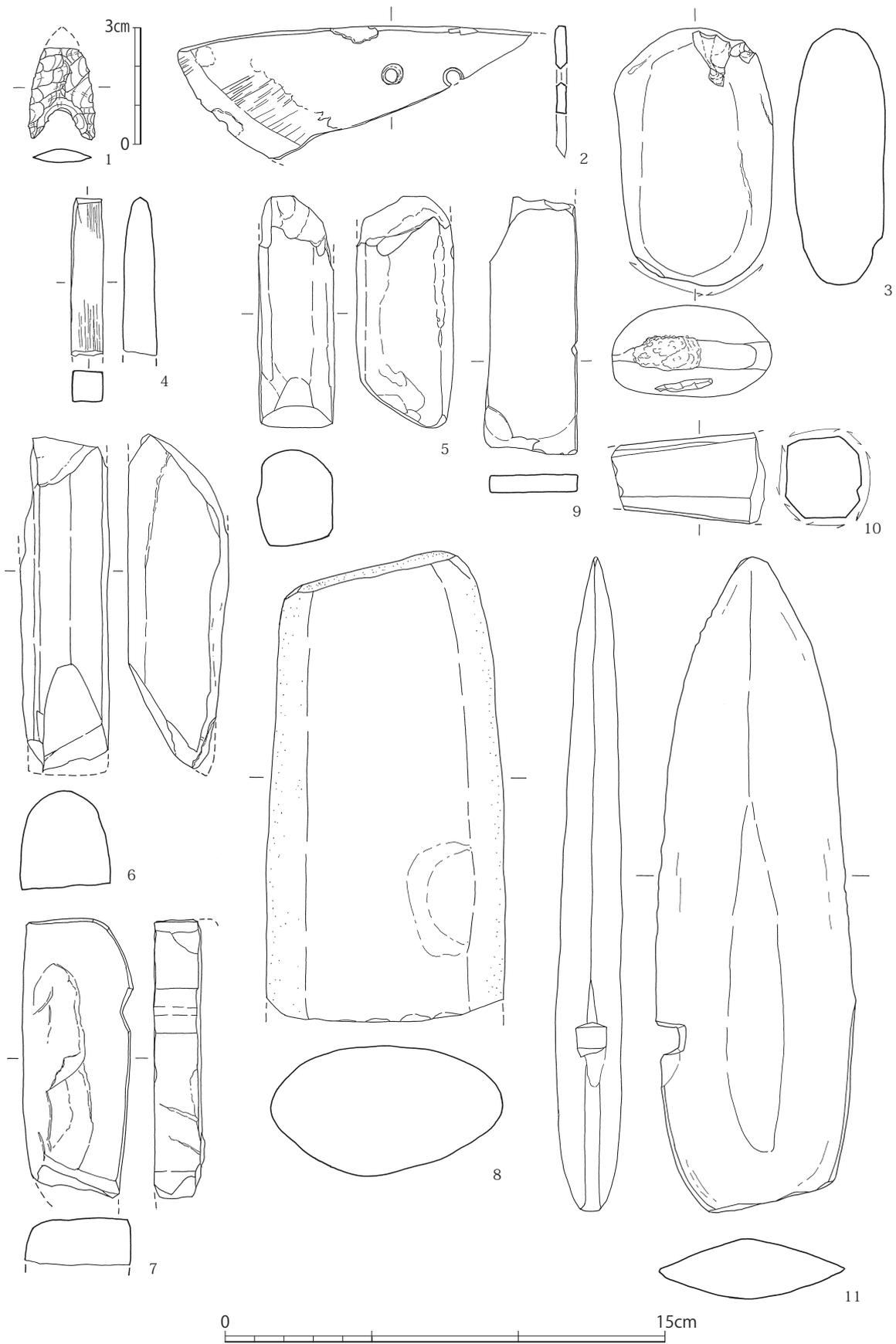
6) 出土石器（図版 19、第 26・27 図）

第1次調査と第3次調査においては、石器類についても多数出土していることが概報に記されたグリッドごとの一覧表などから知れるが、ここでは地区やグリッドが特定できたものについて掲載する。

1は石鏃。先端部を欠く。現存長2.4cm、幅1.6cm、厚さ0.35cm。重量は1.5g。黒曜石製。1号住居跡北表土出土。2は石庖丁。現存長12.0cm、現存幅4.4cm、厚さ0.35cm。重量は27.1g。砂岩製。4号土坑出土。3は磨石。円礫の下端を使用し平滑に磨れている。同部分には敲打痕がみられるため、敲き石として併用していることが知れる。長さ8.8cm、幅5.4cm、厚さ3.1cm。重量220.7g。石材は片岩質。1号住居跡床面出土。4～6は柱状片刃石

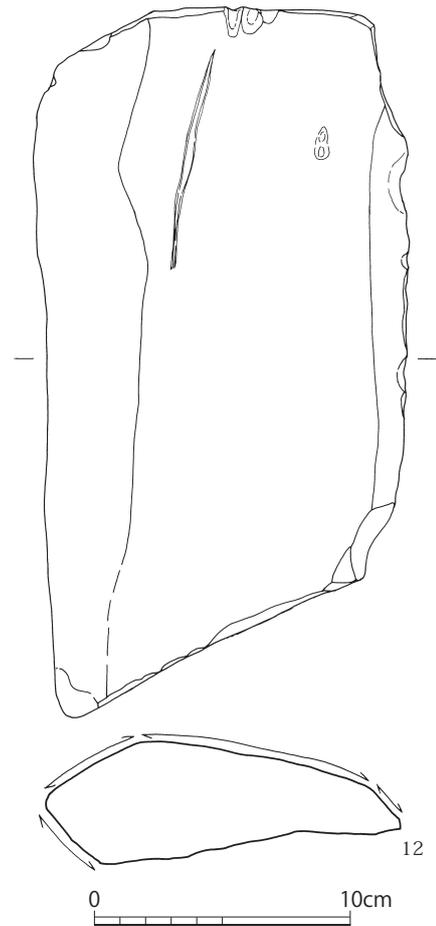


第 25 図 その他の遺構・層位出土土器実測図 (1/4)



第26図 出土石器実測図1 (1は2/3、他は1/2)

斧。4は先端部を欠失する。現存長5.4cm、幅と厚さは1.1cm。重量13.6g。5は基部を欠失する。刃部は使用によるためか丸味を帯びている。断面形状は蒲鋒形。現存長7.9cm、幅2.5cm、厚さ3.3cm。泥岩製。1号土坑下層出土。6は基部と先端部を欠失する。断面は蒲鋒形。現存長11.4cm、幅と厚さは3.4cm。重量191.9g。片岩製。1号住居跡北側表土出土。7は抉入柱状片刃石斧。先端部と裏面を欠失する。現存長9.6cm、幅3.7cm、現存厚1.6cm。重量119.6g。泥岩製。I J 19区出土。8は太型蛤刃石斧。刃部を欠失する。現存長26.1cm、幅8.2cm、厚さ4.4cm。重量1,015.0g。1号土坑出土。9は板状の石製品。表裏面とも磨れており、上面の中央部はわずかに窪む。基部を欠失している。扁平片刃石斧にしては厚みがない。左側縁部は擦切り後分割したようにも見えるが、節理面かもしれない。下端部左隅部は欠損後に磨いて再加工しているようである。現存長8.8cm、幅3.5cm、厚さ0.6cm。重量38.0g。I M 31区表土出土。細粒砂岩製。11は完形の石戈。基部は斜めに整えられ、側縁部に装着用の切り込みを入れる。刃部の先端付近には刃こぼれ様の剥離がみられ、あるいは使用痕の可能性も否定できない。長さ22.5cm、幅6.8cm、厚さ2.0cm。重量は474.8g。石材は泥岩質。1号土坑上層から出土。12は台石。裏面に剥離面を残し、表面は使用により平滑になる。裏面には長さ3～5cmの鋭利な工具による溝状の擦痕が残る。長さ28.0cm、幅14.9cm、厚さ4.9cm。重量2,590g。砂岩。1号土坑7層出土。



第27図 出土石器実測図2 (1/3)

小結

本章では昭和45・47年度に調査を行ったI・J・Q地区の遺構群(第1次調査・第3次調査)について報告した。この地区は三沢遺跡を構成する4つの丘陵のうち、A丘と呼ばれる最高所に位置する。ここで検出された遺構は、弥生時代中期初頭～中期前半の住居跡12棟(小形の住居状遺構を含む)、土坑28基、溝状遺構1条、大溝1条、落ち込み1基、古墳1基である。

集落としては最高所にあたるI・J区に占地する遺構群は、中央部に位置する径7m近い大型の円形住居跡(10号住居跡=第4次調査1号住居跡)を取り囲むように住居と土坑(貯蔵穴)が展開し、東側は空閑地となっている。また、丘陵の東端部には丘陵の落ち際に道

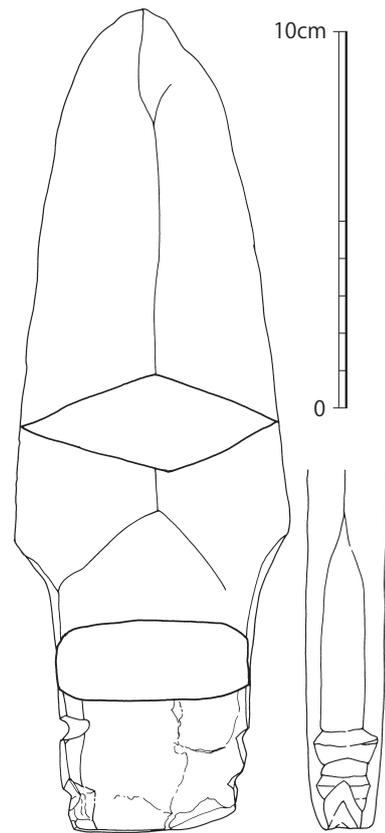
路が切られている。住居跡の形状には円形、長方形、方形、小判形がみられる。このうち切り合いから先後関係が明らかなものは10号住居跡(円形)→9号住居跡(方形)のみで、三国丘陵の周辺状況からは複数の形状が同時期に存在しているようである。出土遺物からみた遺構の時期は11号住居跡・3号土坑・6号土坑が中期初頭、5号住居跡・2号土坑が中期初頭～前半、1号住居跡・9号土坑が中期前半となる。A丘の北東部緩斜面の遺構は28号土坑が中期初頭、23号土坑が中期前半代となる。三沢遺跡全体の集落の存続時期についてはB丘・C丘・D丘の状況が詳らかではないものの、少なくともA丘の集落は、たとえば甕の形状をみても板付式にみえる如意形口縁は数片しかなく、遺構に伴うものは断面三角形の口縁形状と上げ底の亀ノ甲タイプ出現以降に限られることから本格的な集落形成の時期は中期段階である。そしてA丘は他の丘と盛衰を同じくした一連の集落とみられ、調査担当者の西谷正が捉えたように「単位集団」と「単位集団の結合体」と評価されよう。なかでもA丘の単位集団は、最高所に立地すること、大型の円形住居と広場を伴うことなどから、現状の調査成果においては三沢集落のなかでも核としての性格が想定できる。

ところで三沢集落を支えた生業については、北や東に開けた狭い谷を複数抱えることから、こうした場所において谷水田を経営したことが考えられる。しかしながら、集落最東端のC丘とD丘に挟まれる谷頭の確認調査では水田遺構の確認には至っていない。そうした中、三沢遺跡の南に隣接する三沢蓬ヶ浦遺跡3C地点と三沢公家隈遺跡では、集落と水田がセットになる可能性が高い事例が確認されている。前者では丘陵縁部で畠状遺構を伴う前期後半～中期初頭の住居跡が確認され(片岡2004)、この丘陵縁部のすぐ下段の狭い谷部にあたる三沢公家隈遺跡では前期末と中期初頭から前半の水田が検出された(片岡2001)。そして三沢蓬ヶ浦遺跡の畠状遺構から出土した米は陸稲に属する熱帯ジャポニカが半数を占めていたことを踏まえると、この時期には陸稲と水稲が併存していたことになり、集落の時期や立地が似かよる三沢集落でも、今後両者の痕跡が確認される可能性もあり、当時の生業形態を明らかにする材料となろう。ただし一方においては、この時期の三国丘陵では石庖丁をはじめとする農耕具のほかに狩猟具等も多く出土することから縄文時代以来の狩猟・採集に食糧確保を依存する割合も比較的高かったものと思われ、三沢遺跡に関しても同様の状況が考えられる。

弥生時代前期前半段階の三国丘陵では、たとえば力武内畑遺跡のように宝満川の氾濫原に接する三国丘陵縁辺部において集落と水田が確認されていて、次の前期後半には丘陵部に進出する。その要因として橋口達也氏は、「上流域もしくは狭隘な谷水田をひかえた低丘陵をも切り拓いて集落が進出せざるを得ない程急激な人口増加」(橋口1985)を想定し、三沢遺跡はまさにその時期の集落にあたる。

次に、A丘の貯蔵穴から出土している石戈について触れておく。類例は比較的少なく、下條信行氏の集成時で10例(下條1982)を数える。分布をみると三沢遺跡のすぐ南東に位置する横隈山遺跡第2地点など10例中6例が福岡県内で、そのほかに熊本県、宮崎県、山口県、島根県で出土している。この集成以降にどれほど類例が増加したのか把握し

ていないが、県内では福岡市今宿五郎江遺跡、北九州市高槻遺跡などでの出土例を知る。また、香川県支度町鴨部・川田遺跡や大阪府交野市坊領遺跡でも基部が採集され、分布域は下條氏の集成時よりもさらに東に拡がる。時期が判明するものは弥生時代前期末から中期初頭前後に限られる。また機能について下條氏は「(形式的に完成された石戈の) 分布圏とも十分に重なり合う」こと、刺突に適した形状でかつ素手での掌握ができないことから、柄に装着する刺突具として「石矛」という名称を提唱している。下條氏の唱えるように、当該製品について「石戈」の名称を用いることは問題があるとの認識を有した上でその着柄方法を考えてみると、この形状の大きな特徴のひとつとして、基部が身の中軸に対して直角にならない点で戈に通じる。同時に、抉りとは反対側の側縁に向けて斜め上がりになるという左右非対称の形状は、身と柄の軸が揃うような装着方法ではないことを示している。さらに、抉りが側縁の1箇所にし



第28図 対馬出土磨製石劍実測図
(1/2):岡崎1953から転載

設えられないことについて、例えば抉入柱状片刃石斧のように身と柄を略直交方向に装着する方が強固な装着法となる点を勘案し、本稿では戈と同様の使用方法を想定しておく。ところで長崎県対馬市豊玉町仁位からは当該製品に近い特徴を持つ石製品が採集され、磨製石劍として報告されている(第28図、岡崎1953)。この製品は側縁基部を両側から抉り込んで茎状に整え、その下端部側縁にそれぞれ2条、溝状に切り込んでいる。こうした加工は身の中軸方向に柄を装着する磨製石鏃にもみられる仕業で直柄となり、「石矛」と呼ぶにふさわしい形状である。ただ、法量や、身の平面形状、断面が厚みを持った菱形となる点など、当該製品とその特徴が共通する点も多いことから今後の位置づけにかかる参考例として図示しておく。

三沢遺跡の古墳時代の遺構としてはこれまでに古墳3基が報告されている(最高所の高峠: 1号墳/直径16.5~18.5m、2号墳/規模不明、高峠西北方約100mの一段低い丘陵上: 3号墳)。今回報告した4号墳は高峠より一段低い丘陵南斜面に占地する。出土須恵器の時期は7世紀後半から8世紀前半で、おそらくは使用の下限を示す。したがって群としては6世紀の後半に造営がはじまり、8世紀前半まで営まれた状況が確認できる。

【参考文献】

岡崎敬 1953「対馬の先史遺蹟(1)」『対馬』東亜考古学会

片岡宏二 2001「三沢公家隈遺跡調査報告」『三沢蓬ヶ浦遺跡2』小郡市教育委員会

下條信行 1982 「石矛の提唱 - 木葉形磨製石製武器について -」『賀川光夫先生還暦記念論集』
橋口達也 1985 「日本における稲作の開始と発展」『石崎曲り田遺跡Ⅲ』福岡県教育委員会
片岡宏二 2004 『三沢蓬ヶ浦遺跡第3地点』小郡市教育委員会

第5章 総括

I地区を中心とする丘陵上の第4次調査では住居跡3棟、貯蔵穴1基、土坑11基、大溝1条の調査を行った。丘陵頂部は後世の掘削等により本来、存在していたであろう遺構が削られていたことが推察された。当初より保存目的の調査であり、遺構面での検出にとどまり、掘削していないものも多い。

また、第4次調査の周縁部の調査を行った第5次調査においても同様で、大溝以外は検出のみにとどめている。

時期的には、出土遺物が極めて少ないため、明らかではないが弥生時代前期末から中期初頭に該当する。これは従前の調査と矛盾しない。

今回の調査での成果は、昭和時代の調査で検出されていた大溝の断面の形状がハマボコ状を呈することが初めて明らかとなった。また、大溝の両端が丘陵を下る方向に延びることから、丘陵を囲う防御的性格の環濠ではない可能性が高まった。なお、近接する一ノ口遺跡や横隈狐塚遺跡第7地点においては、弥生時代の道路状遺構が検出されており、それらとの同様のものである可能性もある。ただし、大溝についてはトレンチ調査に限られており、その性格、埋没時期については不明で、今後の調査に委ねたい。

また、I地区の丘陵状の頂部付近は残念ながら、恐らく種畜場時代の牧草地のために改変されているが、その土砂は丘陵部の縁辺に厚く被覆されており、この縁辺部には遺構が良好な状態で残存していると考えられる。

今回の調査では、昭和時代の調査の際に提示された「単位集団」や「単位集団の結合体」については十分に迫ることができなかった。今後の調査に期待したい。

図 版

1 三沢遺跡全景
(西から
右上の公園がA地区)



2 第4次調査
調査区全景
(写真上が南西)



3 第4次調査
1号住居 (西から)





1 第4次調査
1号住居炉跡
(西から)

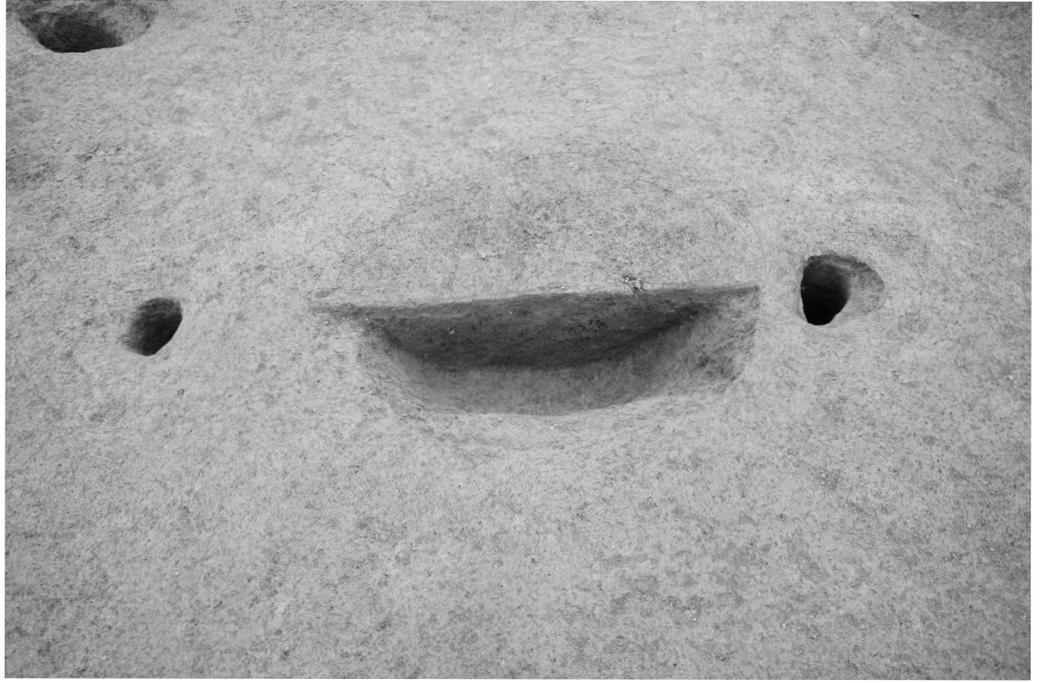


2 第4次調査
1号住居柱穴
(北から)



3 第4次調査
2号住居(西から)

1 第4次調査
2号住居炉跡
(西から)



2 第4次調査
1号貯蔵穴(東から)



3 第4次調査
1号土坑(西から)





1 第4次調査
1号土坑土層断面
(北から)



2 第4次調査
大溝 (南から)



3 第4次調査
大溝 (東から)

1 第4次調査
大溝（西から）



2 第4次調査
大溝（北から）

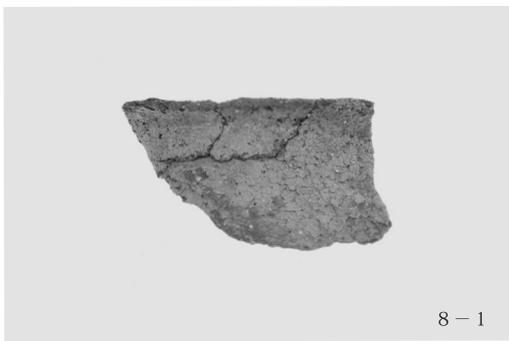


3 第4次調査
東側トレンチ
（北から）





1 第4次調査
北側トレンチ(南から)



8-1



8-2



8-13



8-15



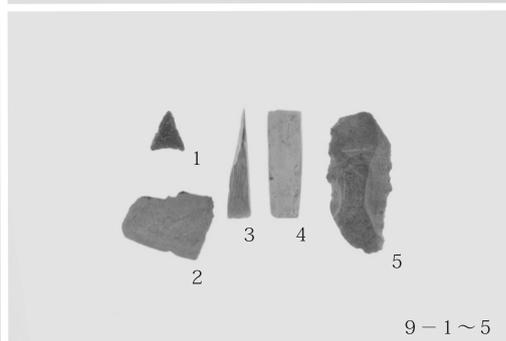
8-22



8-26



8-29



9-1~5

2 第4次調査出土遺物

1 第5次調査遠景
(東から)



2 第5次調査近景
(北東から)



3 第5次調査全景
(写真上が南西)





1 第5次調査
第1・2トレンチ
全景（南から）



2 第5次調査
第1トレンチ
土層断面（南東から）

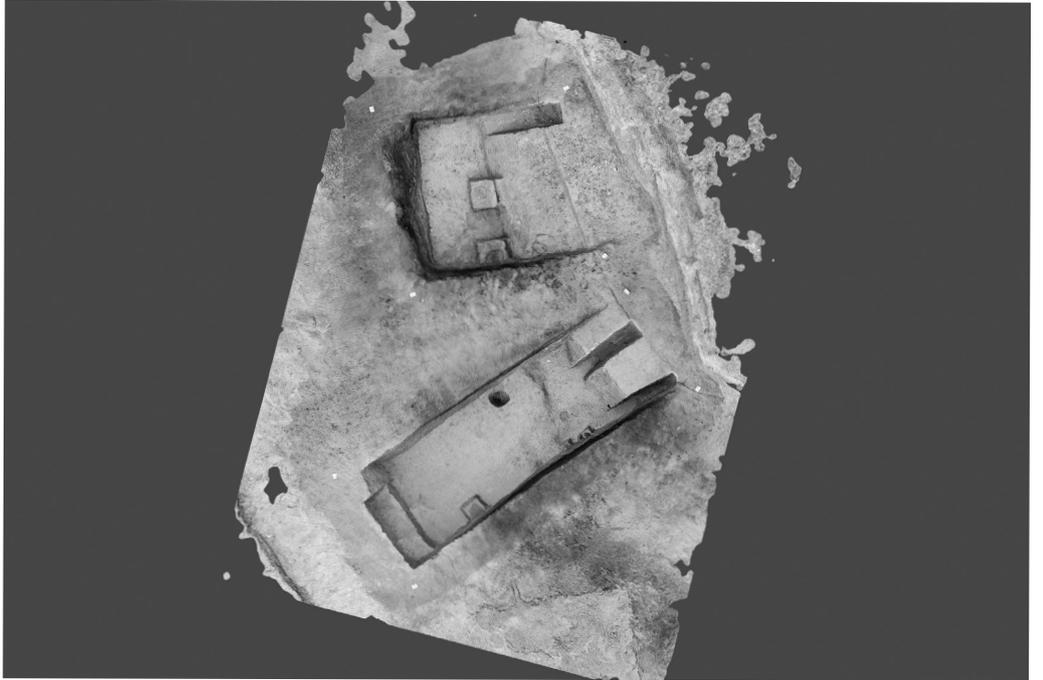


3 第5次調査
第2トレンチ
土層断面（東から）

1 第5次調査
第3トレンチ全景
(南から)



2 第5次調査
大溝断割部
(オルソ画像)



3 第5次調査
大溝断面(昭和45
年度調査試掘坑)
(南から)





1 第5次調査
大溝断面（北から）

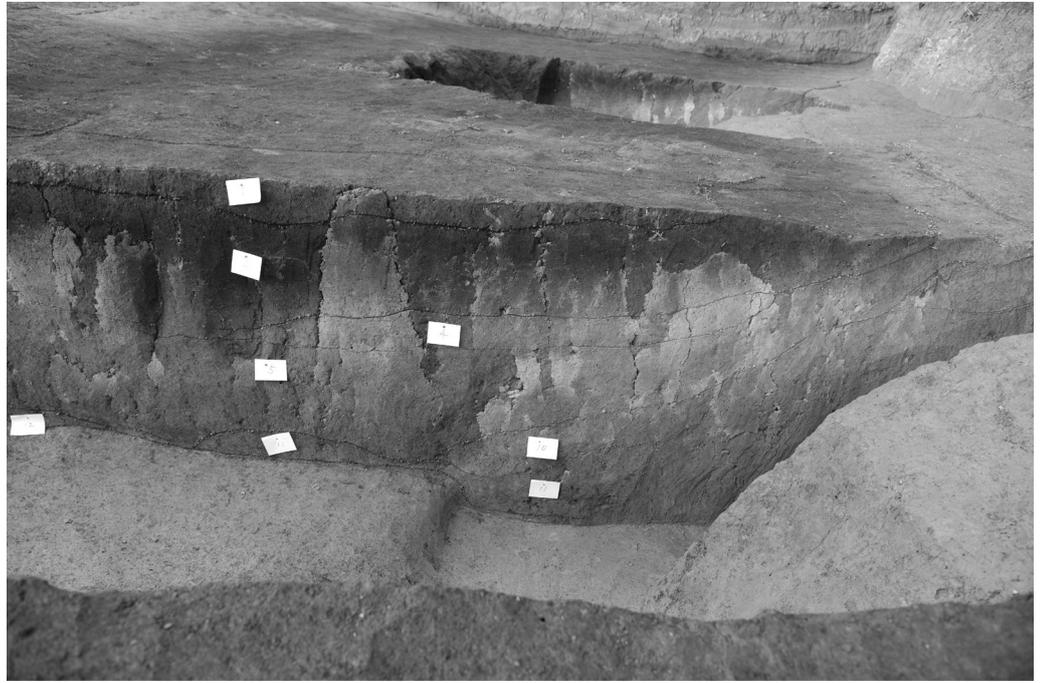


2 第5次調査
大溝年代測定試料
採取箇所（南から）



3 第5次調査
大溝年代測定試料
採取箇所西半部
（南から）

1 第5次調査
大溝年代測定試料
採取箇所東半部
(南から)



2 第5次調査
大溝年代測定試料
採取箇所(小土坑)
(南から)



3 第5次調査
大溝年代測定試料
採取箇所(小土坑
接近)(南から)





1 第5次調査
第4トレンチ全景
(写真上が北西)



2 第5次調査
第4トレンチ
南西壁断面北半部
(北東から)



3 第5次調査
第4トレンチ
南西壁断面南半部
(北東から)

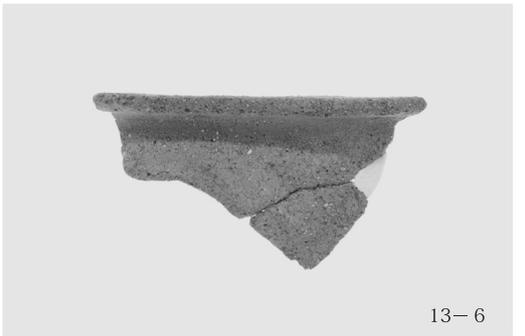
1 第5次調査
第5トレンチ全景
(写真上が南西)



2 第5次調査
第5トレンチ
南壁土層断面西半部
(北から)



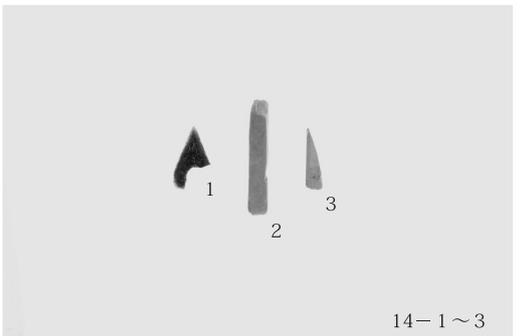
13-1



13-6



13-18



14-1~3

3 第5次調査出土遺物



1 三沢遺跡
(南西から)



2 三沢遺跡
(東から)

1 I・J地区
(南西から)



2 高峠とI・J地区を
望む(東から)



3 Q地区(奥はD丘)
(南西から)





1 手前から1号住居・
4号土坑・3号住居
(北西から)

2 2号住居(北西から)



3 手前から4号住居・
3号土坑・2号土坑・
1号土坑(北東から)



4 1号土坑と
石戈出土状況
(南西から)

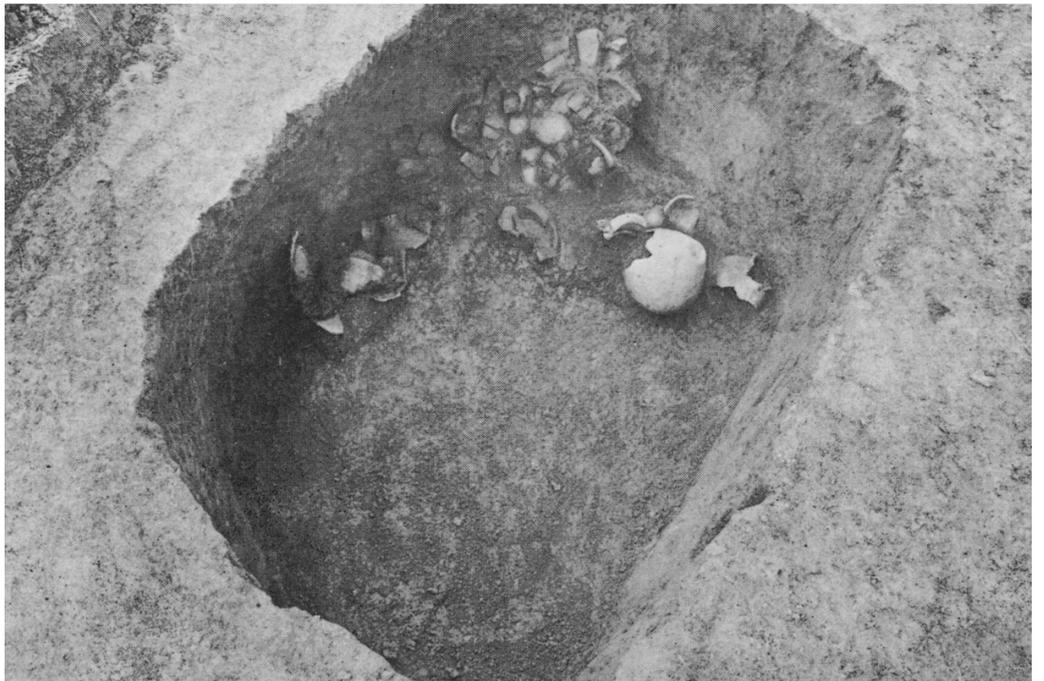
1 1号土坑
石戈出土状況
(南西から)



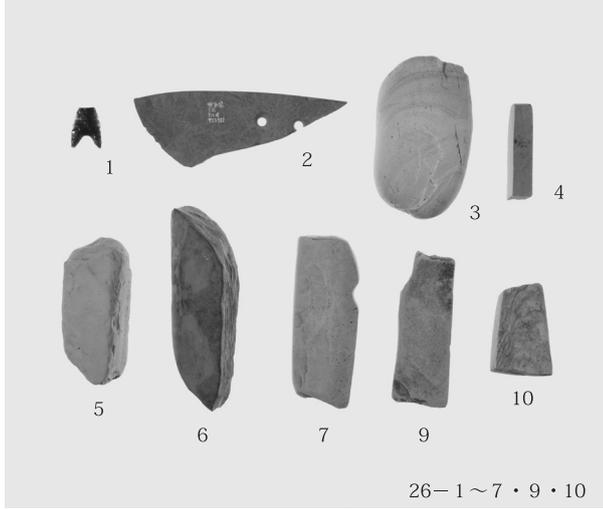
2 溝 (西から)



3 9号土坑 (北東から)







報告書抄録

ふりがな	みつざわいせきかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	三沢遺跡確認調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第279集							
編著者名	進村真之(編集)・岡田諭・吉村靖徳・古環境研究所							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3 TEL 0942-75-9575							
発行年月日	令和4(2022)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
三沢遺跡 第1次調査	福岡県小郡市三沢 5107-7他	40216	2033	33° 26' 15"	130° 33' 35"	19710122 ～ 19710220	3,699	試掘調査
三沢遺跡 第3次調査	福岡県小郡市三沢 5107-7他	40216	2033	33° 26' 15"	130° 33' 35"	19720808 ～ 19720906	1,078	採土
三沢遺跡 第4次調査	福岡県小郡市三沢 5107-7他	40216	2033	33° 26' 15"	130° 33' 35"	20190912 ～ 20191220	1,500	確認調査
三沢遺跡 第5次調査	福岡県小郡市三沢 5107-7他	40216	2033	33° 26' 15"	130° 33' 35"	20200923 ～ 20210217	1,013	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三沢遺跡 第1次調査	集落・古墳	弥生時代・ 古墳時代	竪穴住居跡・ 貯蔵穴・土坑・溝・古墳	弥生土器・須恵器・石器				
三沢遺跡 第3次調査	集落・古墳	弥生時代	竪穴住居跡・ 貯蔵穴・土坑・溝	弥生土器・石器				
三沢遺跡 第4次調査	集落	弥生時代	竪穴住居跡・ 貯蔵穴・土坑・溝	弥生土器・石器				
三沢遺跡 第5次調査	集落	弥生時代	竪穴住居跡・ 土坑・溝	弥生土器・石器				
概要	三沢遺跡の将来的な整備を目的として、令和元・2年度にかけて確認調査を行った。 調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡や貯蔵穴などの遺構を検出した。							

福岡県行政資料	
分類番号 JH	行政コード 2120261
登録年度 3	登録番号 2

三 沢 遺 跡

確認調査報告書

福岡県文化財調査報告書 第279集

令和4(2022)年3月31日

発 行 九州歴史資料館

福岡県小郡市三沢5208-3

印 刷 株式会社 プリンティング コガ

福岡県大川市一木736-5